福岡市埋蔵文化財調査報告書 第215集

原遺跡 3

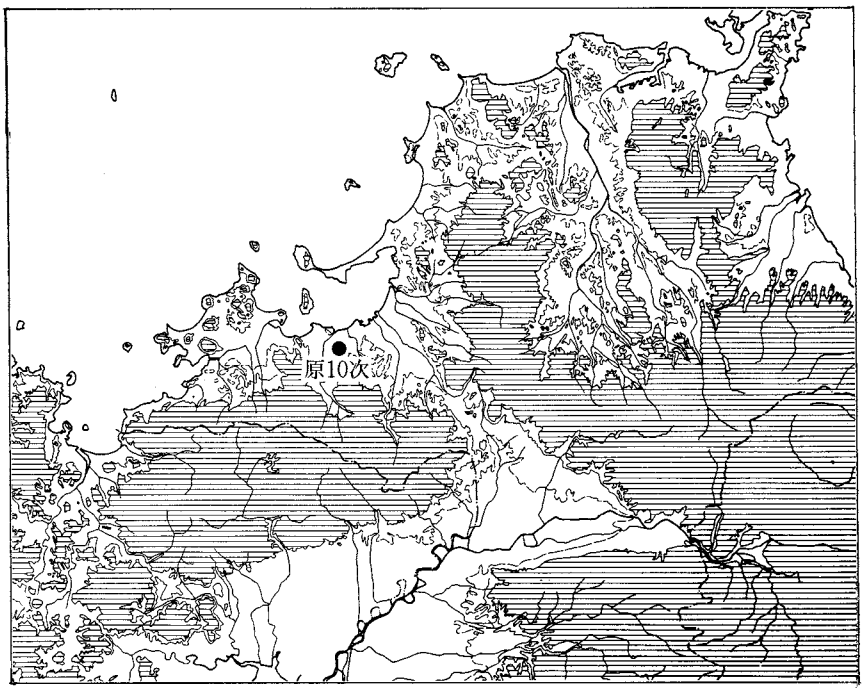
—原遺跡群第10次調査の報告—

1990

福岡市教育委員会

原遺跡 3

—原遺跡群第10次調査の報告—



遺跡調査番号　8814

遺跡略号　ＨＡＡ10

1990

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市はここ数年都市化が著しく進行し、新たな景観を生みだしています。木造から鉄筋コンクリートの高層住宅への建て替え、道路の整備等、開発の波が押しよせ昔の水田風景や集落は地図や写真にそのおもかげを偲ばせるのみです。

今回の調査も、需用に応じた市営住宅建て替え工事に伴うものでした。

調査は中世の農村集落風景を想像させるもので、また過去の土地区画（条里）方向に沿った大溝も検出されました。その結果条里の施行された時期や水利の問題等が提起されます。

本書はこの成果を収めたものであり、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに研究上役立てれば幸いです。

調査から整理に至りましては多くの方々の御理解と御協力を賜わりましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成2年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は福岡市建築局住宅整備課が計画した原市営住宅建て替え工事の事前調査として、福岡市教育委員会が昭和62年５月から同年10月にかけて実施した原10次調査の報告書である。

2．本書に掲載した方位は磁北である。真北から６°西偏する。

3．遺物実測は荒牧が、製図は田崎真理が主に行なった。

4．本書に掲載する写真撮影は、現場では荒牧、遺物は田中が行なった。

5．遺物実測図は通し番号で行い、遺構実測図の土器片にも同じ番号を使用した。

6．本書の執筆・編集は荒牧が行なった。

7．原遺跡群第10次調査の出土遺物、実測図及び写真等の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。

遺跡調査番号	８８１４		遺跡略号	ＨＡＡ１０	
調査地地籍	福岡市早良区原５丁目1225-7外		分布地図番号	８２－Ａ－２	
開発面積	7,928.2㎡	調査対象面積	6,000㎡	調査実施面積	5,241㎡
調査期間	昭和62年５月23日～昭和62年10月31日		事前審査番号		

本 文 目 次

本頁

Ⅰ　はじめに…… 1
(1)　調査にいたる経過…… 1
(2)　調査の組織…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 3
(1)　位置と地形…… 3
(2)　歴史的環境…… 3
Ⅲ　調査の経過と概要…… 7
1．調査区の設定と名称…… 7
2．調査の経過…… 7
3．土層…… 7
4．概要…… 7
Ⅳ　遺構と遺物……10
(1)　掘立柱建物……10
(2)　井戸（ＳＥ）……18
(3)　土壙（ＳＫ）……23
(4)　溝（ＳＤ）……27
(5)　その他の遺構……31
Ⅴ　まとめ……35
1．遺構の配置と時期……35
(1)　大溝（ＳＤ０６）について……35
(2)　掘立柱建物について……35

挿図目次

Fig. 1　周辺の遺跡(1／50,000)…… 2
Fig. 2　原遺跡現況(1／5000)…… 4
Fig. 3　原遺跡旧地形(1／5,000)…… 5
Fig. 4　原10次調査地点周辺(1／500) …… 8
Fig. 5　調査区北西壁土層断面(1／40) …… 9
Fig. 6　掘立柱建物跡実測図Ⅰ(SB01～03) (1／100) ……11
Fig. 7　掘立柱建物跡実測図Ⅱ(SB04～06) (1／100) ……12
Fig. 8　掘立柱建物跡実測図Ⅲ(SB07～09) (1／100) ……13
Fig. 9　掘立柱建物跡実測図Ⅳ(SB10～14) (1／100) ……14
Fig. 10　掘立柱建物跡実測図Ⅴ(SB15・16) (1／100) ……15
Fig. 11　柱穴出土遺物実測図(1／3) ……17
Fig. 12　井戸実測図(1／40) ……19
Fig. 13　SE01出土遺物実測図(1／3) ……20
Fig. 14　SE01～03出土遺物実測図(1／3) ……21
Fig. 15　土壙実測図Ⅰ(SK01～07) (1／40) ……24
Fig. 16　土壙実測図Ⅱ(SK08～13) (1／40) ……25
Fig. 17　土壙出土遺物実測図(1／3) ……26
Fig. 18　SD06土層断面図(1／40) ……28
Fig. 19　溝出土遺物実測図Ⅰ(SD01～04・06) (1／3) ……29
Fig. 20　溝出土遺物実測図Ⅱ(SD07～11) (1／3・1／1) ……30
Fig. 21　SX01実測図(1／40) ……31
Fig. 22　SX01出土遺物実測図Ⅰ(1／3) ……32
Fig. 23　SX01出土遺物実測図Ⅱ(1／3) ……33
Fig. 24　SX01出土遺物実測図Ⅲ(1／3) ……34
Fig. 25　SX02～04出土遺物実測図(1／3) ……34
Fig. 26　早良平野条里復元図 ……36
付図　(1)調査区遺構配置図　(2)池状遺構土層断面図

図版目次

図版トビラ　調査区近景（南東から）
ＰＬ．1　上　調査区北西部（Ⅰ区）全景（南から）
　　下　調査区北東部（Ⅱ区）全景（南から）
ＰＬ．2　上　調査区南部（Ⅲ区）全景（西から）
　　下　調査区（Ⅰ区）北西部土層断面（南東から）
ＰＬ．3　上　ＳＢ01検出状況（北から）
　　下　ＳＢ02検出状況（東から）
ＰＬ．4　上　ＳＢ03・04検出状況（西から）
　　下　ＳＢ04検出状況（東から）
ＰＬ．5　上　ＳＢ06検出状況（西から）
　　下　ＳＢ07～10検出状況（南から）
ＰＬ．6　上　ＳＢ11～16検出状況（南から）
　　下　ＳＥ01完掘状況
ＰＬ．7　上　ＳＥ02完掘状況（西から）
　　下　ＳＥ03完掘状況（南から）
ＰＬ．8　上　ＳＫ01～03完掘状況（東から）
　　下　ＳＫ01完掘状況（北から）
ＰＬ．9　上　ＳＫ01遺物出土状況（北から）
　　下　ＳＫ02完掘状況（北から）
ＰＬ．10　上　ＳＫ03完掘状況（東から）
　　下　ＳＫ04完掘状況（東から）
ＰＬ．11　上　ＳＫ05完掘状況（東から）
　　下　ＳＫ07・08完掘状況（南から）
ＰＬ．12　上　ＳＫ09・10完掘状況（北西から）
　　下　ＳＫ11完掘状況（西から）
ＰＬ．13　上　ＳＫ12完掘状況（東から）
　　下　ＳＫ13完掘状況（西から）
ＰＬ．14　上　調査区北東部全景（西から）
　　下　大溝中央ベルト断面（西から）

ＰＬ.15　上　大溝（西から）
　　下　大溝（ＳＤ06）全景（東から）
ＰＬ.16　上　ＳＸ01遺物出土状況（南から）
　　下　ＳＸ01完掘状況（南から）
ＰＬ.17　上　池状遺構（西から）
　　下　池状遺構土層断面遠景（北から）
ＰＬ.18　　ＳＥ03、ＳＫ01出土遺物
ＰＬ.19　　ＳＫ01、ＳＥ01、03、ＳＤ07、ＳＸ01出土遺物（石鏃は遺構検出時出土）
ＰＬ.20　　ＳＸ01出土遺物

I　はじめに

1　調査に至る経過

福岡市建築局住宅整備課は従来の原市営住宅（所在、早良区原５丁目1225－７外）を高層建築に立て替える計画のもとに、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して事前審査を依頼した。これを受けて、埋蔵文化財課では昭和62年12月15日～16日にかけて試掘調査を行なった。この結果、遺構の密度は薄いもののほぼ全面に検出されることから要調査という判断が下された。この事前審査の判断のもとに、発掘調査を昭和63年５月23日～同年10月31日（延べ110日）にかけて実施した。

本調査地点付近は都心（天神地区）に近く、交通の便も良いため宅地化の開発が著しく進行している。しかし、調査件数はまだ少なく、今回で10次を数えるにすぎない。従って、埋蔵文化財に関しては不明な点が多い。今後、急激に増加することが予想される調査に対して、本調査の先駆けになるものである。

2　調査の組織

調査は下記の組織体制で行なった。

調査委託　福岡市建築局住宅整備課

調査主体　福岡市教育委員会　教育長佐藤善郎（埋蔵文化財課主管）

調査総括　埋蔵文化財課長　柳田純孝

埋蔵文化財第一係長　折尾学

事前審査　文化財主事　山崎純男

（試掘・協議）埋蔵文化財第一係　大庭康時

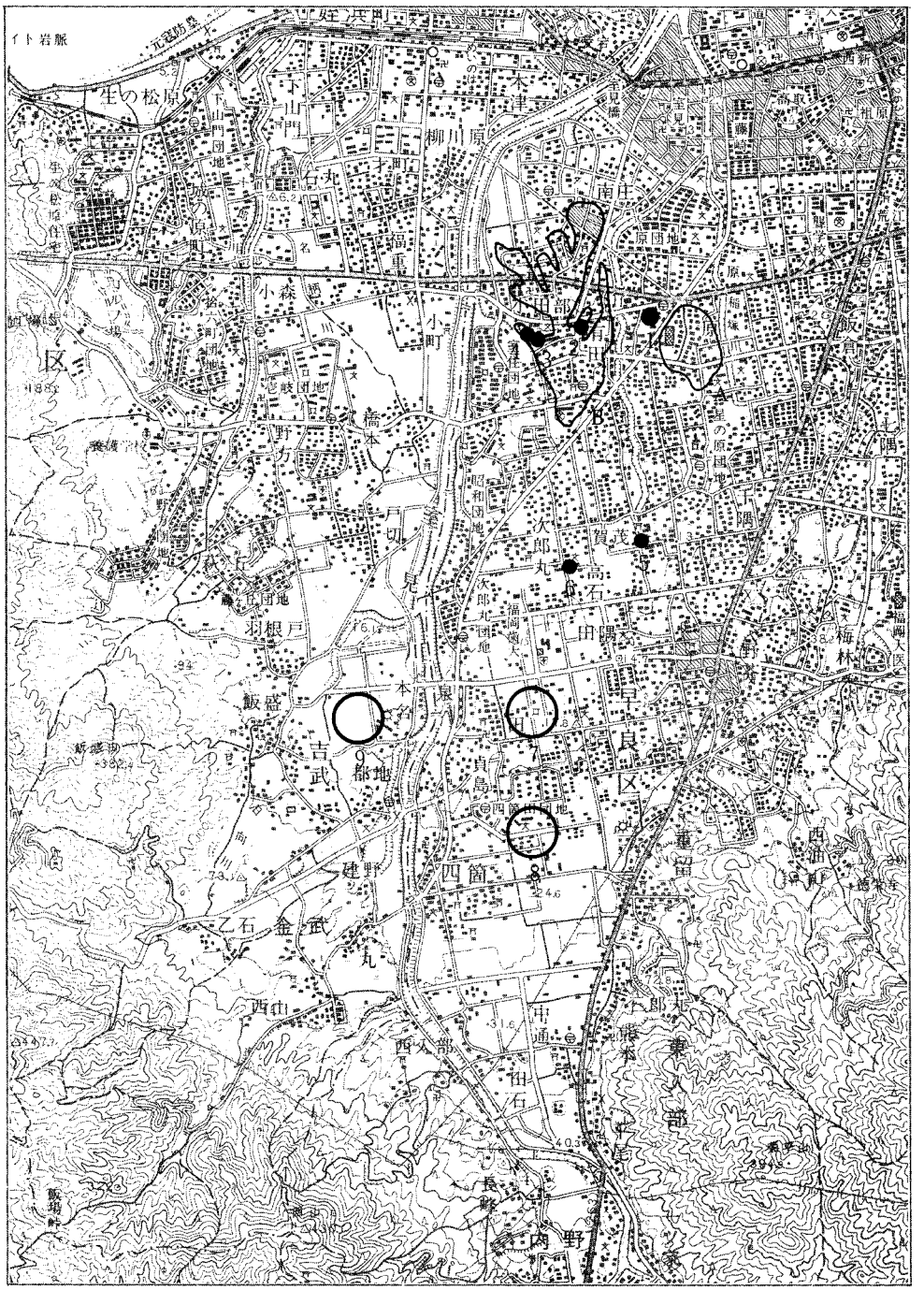
埋蔵文化財第二係　米倉秀紀

調査事務　埋蔵文化財第一係　松延好文

調査担当　埋蔵文化財第一係　荒牧宏行

調査作業員　柳浦八重子　横溝恵美子　横溝カヨ子　富崎栄子　富崎文子　山口タツエ　小柳和子　因ヨシ子　倉光アヤ子　倉光京子　倉光千鶴子　斉藤國子　青柳弘子　井上ムツ子　井上清子　井上磨智子　井上トミ子　清末シズエ　結城千代子　井上ヒデ子　永井鈴子　徳永ますみ　佐藤みずほ　尾園佳枝　今村加代子

資料整理　溝口博子　安野良　松尾絹代　田村妙子　馬場イツ子



A、原遺跡群、 B、有田、小田部遺跡群
1、原第10次　2、有田・小田部遺跡第3次　3、有田・小田部遺跡第59次　4、有田・小田部遺跡第60次　5、鶴町遺跡　6、次郎丸高石遺跡
7、田村遺跡群　8、四箇遺跡群　9、吉武遺跡群

Fig.1　周辺の遺跡

II　位置と環境

1　位置と地形

北部九州に位置する福岡市は海岸平野の占める割合が大きい。その平野部は後背の山塊から北側の博多湾に向かって求心状に延びる丘陵によって、東から粕屋平野、福岡平野、早良平野に分けられる。

当遺跡は早良平野のほぼ北側中央部に位置する。早良平野は中央部を北流する室見川の営力によって主に形成された沖積平野である。上記のように山塊ないし丘陵によってこの平野は東の福岡平野、西の糸島平野から分け隔てられる。

当遺跡周辺の微地形について次に述べる。

当調査地点の西側約200mに有田台地の東を限る金屑川が北流する。有田台地は南北約１km、東西0.7kmにわたって広がる中位段丘である。台地周辺は著しく侵食を受けている。最頂点は標高15mを測る。

東側約200mには原遺跡の主要部である台地の裾部が延びてきている。原台地は南北550m、東西250mにわたる。最高頂の標高約７ｍの微高地である。

当調査地点は上記の原と有田台地に狭まれた沖積地に立地する。現状での標高4.60mを測る。検出面のレベルは旧地形図に表されるように北東方向へ減じている。

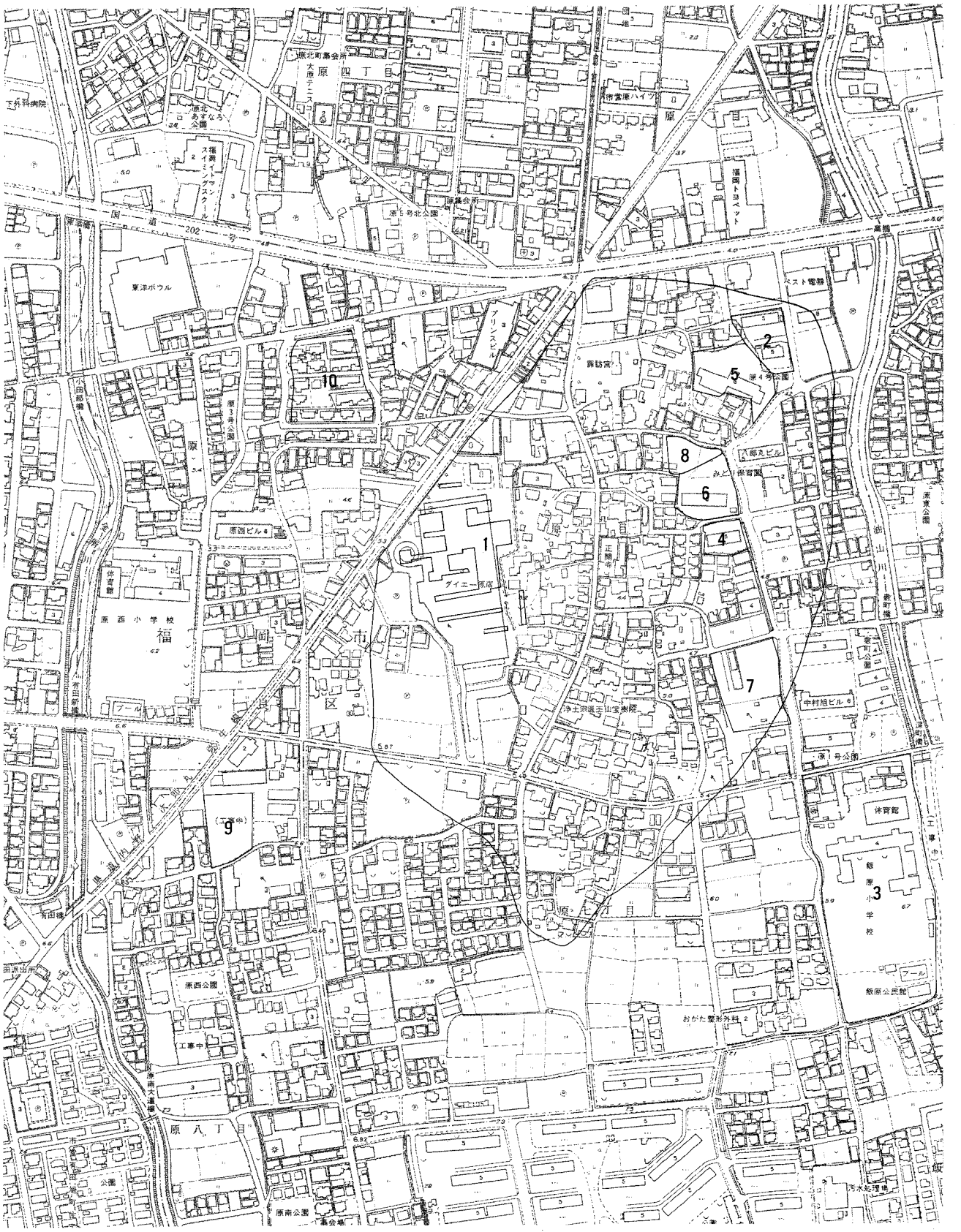
2　歴史的環境

ここでは当調査の中心をなす中世について記す。

周辺では有田遺跡の調査が最も進行し、その内容が明らかになりつつある。有田遺跡は旧石器時代から現代までの遺構が連綿と密に検出される。その中で、中世で注目されるのは有田第59次、有田第60次調査である。発掘[註1]の結果、方形に巡る溝が検出された。館跡と考えられ、13～15世紀の遺物が出土している。有田第３次、第81次調査[註2]では条里の方向を存続する現在の道路に沿って幅約５ｍの溝が検出された。溝は東西の条里方向に走るが東側の谷落ちで途切れる。この溝の延長方向に今回調査で検出された大溝（ＳＤ０６）が走行する。この大溝については再説する。有田遺跡についての文献では、大内氏早良郡代大村興景の知行地や大友氏の被官、小田部氏の小田部城が知られる。

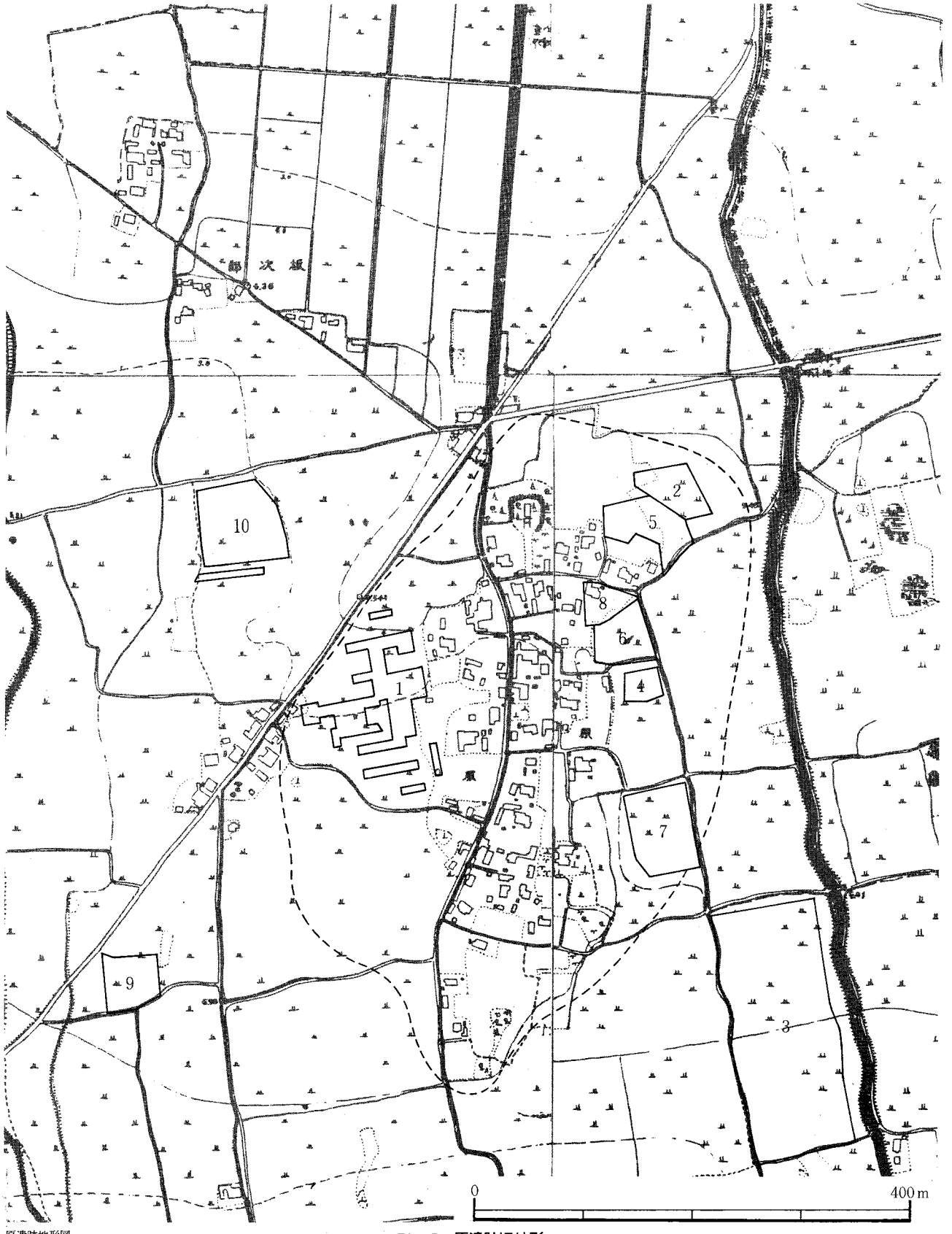
原遺跡群は今回の調査で10次を数えるに過ぎない。調査では中世の遺物や遺構が目立つもののその実態は明らかではない。既往の調査については原遺跡２（原遺跡群第９次調査）[註3]の報告に詳しいので委ねる。その後の調査では、原遺跡群第12次調査で先の有田で検出されたような館を囲む溝が検出されたことを付記しておく。

有田遺跡、原遺跡ともに輸入陶磁器の出土割合が比較的高い。中世貿易で栄えた博多が近く



原遺跡地形図
1～10　各調査次数
1．原談義遺跡
3．原深町遺跡

Fig.2　原遺跡現況



原遺跡地形図
1～10　各調査次数
1．原談儀遺跡
3．原深町遺跡

Fig.3　原遺跡旧地形

であることや、大内氏の影響が考えられる。

最後に早良平野における中世集落がよく知られる田村遺跡[註4]について略述しておく。田村遺跡は早良平野のほぼ中央の沖積地に立地する。掘立柱建物の配置復元が良好である。集落は時期の推移とともに移動するらしい。沖積地に集落が進出、形成されていく過程が知られる。尚、条里にそった南北方向の12世紀代の大溝も検出された。

註1　福岡市教育委員会「有田・小田部第2集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集　1982
　　福岡市教育委員会「有田・小田部第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集　1986

註2　福岡市教育委員会「有田・小田部第8集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集　1987
　　福岡市教育委員会「有田遺跡群－第81次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集　1986

註3　福岡市教育委員会「原遺跡2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第140集　1986

註4　福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集　1982
　　福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集　1984
　　福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集　1987
　　福岡市教育委員会「田村遺跡Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集　1987

Ⅲ　調査の経過と概要

1、調査区の設定と名称

調査対象地は、市営住宅建設地内ほぼ全域とした。調査面積は、5241㎡を占める。尚、敷地内南側を略東西に走る舗装道路部分、及びプレハブを設置した道路以南の敷地東側は調査区から除外した。

調査区は舗装道路を境にして北側のⅠ、Ⅱ区と南側のⅢ区に便宜上区分した。Ⅰ区とⅡ区は廃土置き場を確保する為に、分けて調査をおこなった範囲区分にすぎない。

調査区内は10mメッシュで抗打ちを行い、遺物取り上げや遺構実測に使用した。基準線は磁北から2°30′東へ偏る。

2、調査の経過

調査は昭和64年5月23日から開始した。最初にⅠ区のみユンボで表土剥ぎを行なった。試掘では遺構検出面が2面認められた事から、表土剥ぎは水田土壌下の暗褐色土で一部止めた。しかし、このレヴェルでは明確な遺構は検出されず、まだ西部ではこの土層の堆積が悪く床土下から下層の明黄褐色粘質土がみえだした。この為、北側の一部（後に大溝が検出された付近）を残し、明黄褐色粘質土まで下げ遺構検出を行なった。

Ⅰ区の調査を概ね8月23日に終えた。Ⅱ区は廃土処理の為、Ⅰ区と切り返して表土剥ぎを開始した。Ⅲ区は9月16日から開始し、全調査は10月31日に終えた。

3、土層（Fig.5、PL.2）

調査地点は、現状では標高4.60～4.70mの平坦面をなしている。以下、基本層序を示す。Ⅰ層は表土層である。上層から、マサによる盛り土（層厚15～30cm）、水田耕作土（層厚25cm）、床土（層厚5cmの酸化鉄集積層）の層位をなす。Ⅱ層は暗褐色～黒褐色の遺物包含層である。この層は調査区のほぼ全域に、層厚10cm程堆積する。しかし、西部では地形的に高い為、削平を受け残りが悪い。Ⅱ層からは中世迄の遺物が出土した。Ⅲ層は遺構検出面の明黄褐色粘質土である。西側中央では砂質となる。調査区内でのⅢ層上面は標高4.00～4.30mを測り、北東方向へ緩やかに下降する。Ⅳ層は礫混じりのシルト層である。その上面標高は西側中央部で、2.90m（Ⅲ層上面下－140cm）、Ⅱ区南東部で3.10mを測る。

4、概要

本調査地点は原遺跡群の北西沖積部に位置する。検出された遺構は弥生中期の土壙1基以外は全て中世に属する。中世の遺構では大溝（SD06）、溝、掘立柱建物、井戸、土壙墓、土壙が検出された。最も留意されたのは条里の方向に沿って東西に走る大溝であった。同方向の大溝

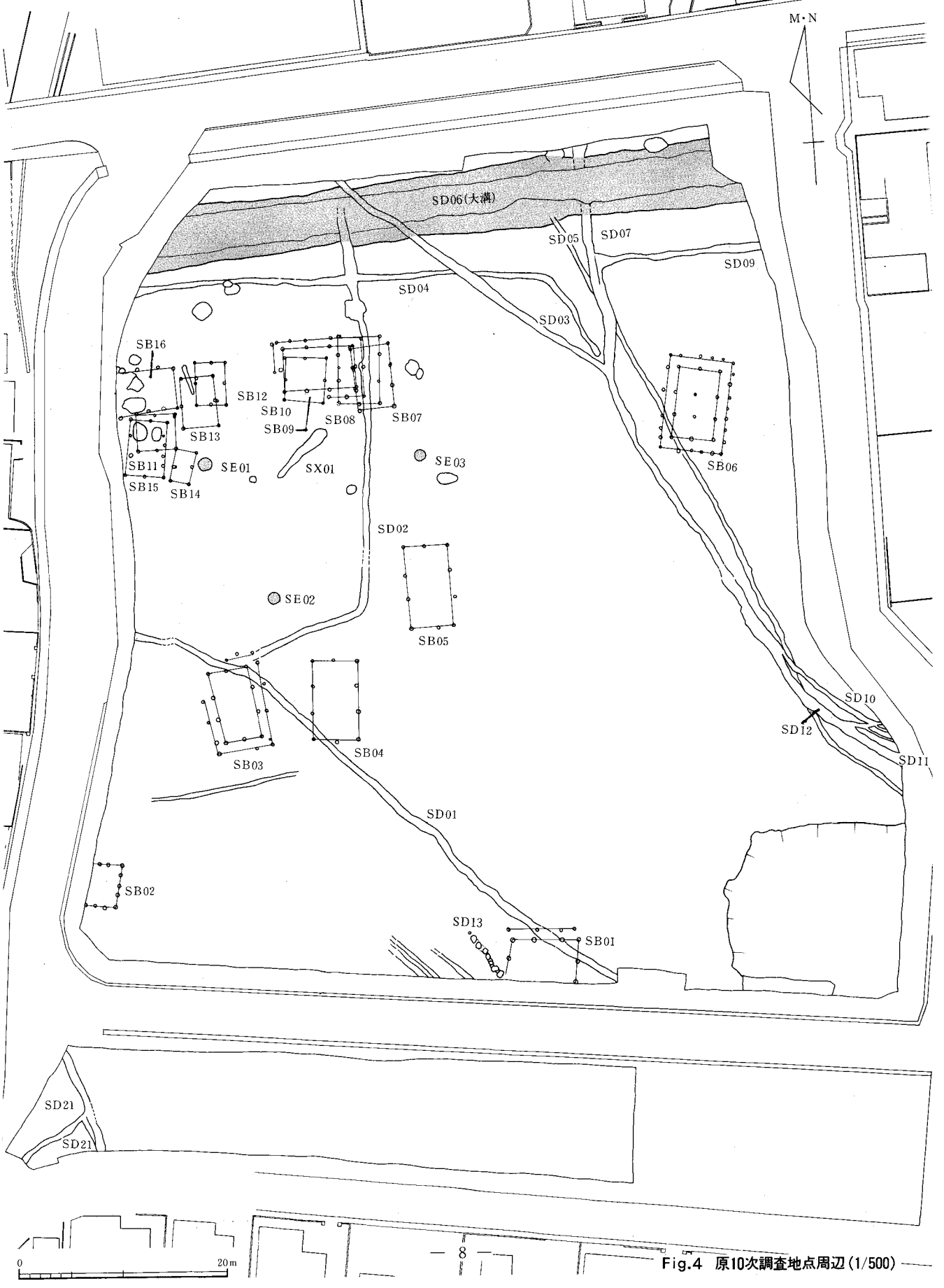


Fig.4 原10次調査地点周辺(1/500)

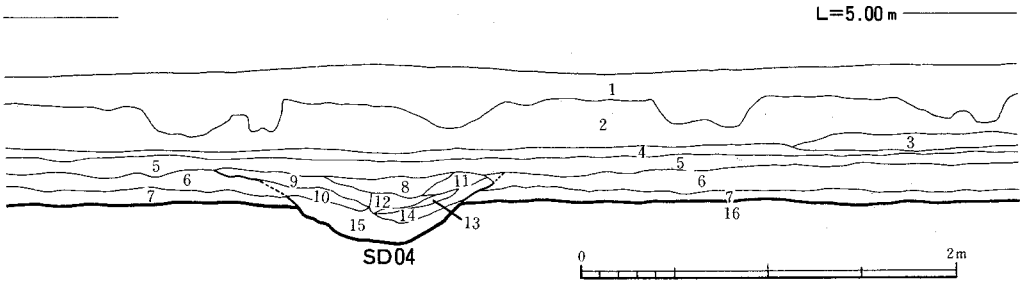


Fig.5 調査区北西壁土層断面（1／40）

第1層　盛土（マサ土）
第2層　表土　水田耕作土（還元土）
第3層　明黄褐色土
第4層　明黄褐色土（床土）
第5層　黒褐色土（マンガン粒子多く含む。赤褐色土粒子若干含む）
第6層　暗褐色土（マンガン粒子多く含む。しかし第5層ほど含まない。赤褐色土粒子若干含む）
第7層　黒褐色土（まだらに黒味が強い）
第8層　暗褐色土
第9層　暗褐色土
第10層　暗褐色土
第11層　暗褐色土
第12層　暗褐色土
第13層　明黄褐色土（地山）混り暗褐色土。極めて明瞭に識別できる。
第14層　明黄褐色土（地山）混り暗褐色土。極めて明瞭に識別できる。
第15層　暗褐色土　この層中及び上面に部分的に粗砂が混入。
第16層　明黄褐色粘質土

は有田第3次調査でも検出されている。詳細は後述するが時期、条里プランや水源の問題は大きい。

集落として利用された時期は、大溝を含む溝が廃棄されて以後と考えられる。地形的にも、また遺構の密度から言っても調査地点は集落の外れで、その中心は以西であろう。しかし、遺構の密度が薄いために掘立柱建物の構造や配置が明確に判断できた。

Ⅳ　遺構と遺物

検出された遺構は弥生中期の溝状土壙１基以外はすべて中世である。その数を記すと、掘立柱建物16軒、井戸３基、土壙12基、溝25（大溝１を含む）である。

以下、各遺構の種類別に観察と遺物の説明を記載する。

(1)　掘立柱建物

柱穴が少なく散在的であった為に、現場で、検出した柱穴をほとんど拾いあげ復元することができた。柱穴埋土は暗褐色ないし褐色土でその輪郭は明瞭であった。柱穴掘り方の深さは側柱で30cm程のこり、遺存は良好であった。

掘立柱建物の配置は調査区の北西部に立て替えを含め集中する。（ＳＢ０７～１６）その他は孤立的で、とくに調査区東側ではＳＢ０６が検出されたのみである。復元した掘立柱建物は２×３間のものが７軒で大半を占める。その中には側柱の外側に並行する廂柱（軒柱）をもつものもある。

ＳＢ０１（Fig. 6、ＰＬ. 3）

Ｉ区の南東部で検出された。南側は舗装道路の為に未調査であるが、２×３間の東西棟であろう。北側桁行の柱列は柱間210cm（７尺）弱で直線的に配列されている。西側の梁間柱は外にはずれている。北面に廂柱（軒柱）が取付く。P_{10}は隅柱のP_5より西にずれる。P_{11}は深さ８cmの浅い堀り方である。P_4、P_6、P_8はＳＤ01を切る。

ＳＢ０２（Fig. 6、ＰＬ. 3）

Ｉ区の南西隅で検出された。西側は調査区外の為に未検出である。柱穴径は18cm程度の小さいもので、深さも10cmと浅い。柱間は88～116cmで、東面全長383cmを測る。北面柱列は東面にほぼ直行するが、南面柱列は外側に開く。

ＳＢ０３（Fig. 6、ＰＬ. 4）

Ｉ区の西側中央部で検出された。身舎は２×３間の南北棟である。主軸はＮ－20°－Ｗで、検出された南北棟の中では最も西にふれている。側柱の柱穴の位置はほぼ軸線上にのるが、北側の梁間柱がやや外にはずれる。側柱の柱間は梁柱が174～190cm、桁柱が216～232cmを測り、あまり一定していない。P_{29}、P_{30}は柱列から外れているが一応、床束柱としておく。深さはP_{29}が10cm、P_{30}が18cmと浅い。

身舎から90cm（３尺）離れて４面に廂（軒柱）が検出された。この廂柱列の北東隅柱は欠く。P_{23}（深さ20cm）、P_{25}（深さ12cm）が柱列から外れて検出されたが、構造的には不明。南南側の廂柱列のP_{12}、P_{13}とP_{14}、P_{15}は同一ライン上にのらない。

ＳＢ０４（Fig. 7、ＰＬ. 4）

ＳＢ０３に並行するようにその東側で検出された。主軸がほぼ磁北を向く２×３間の南北棟

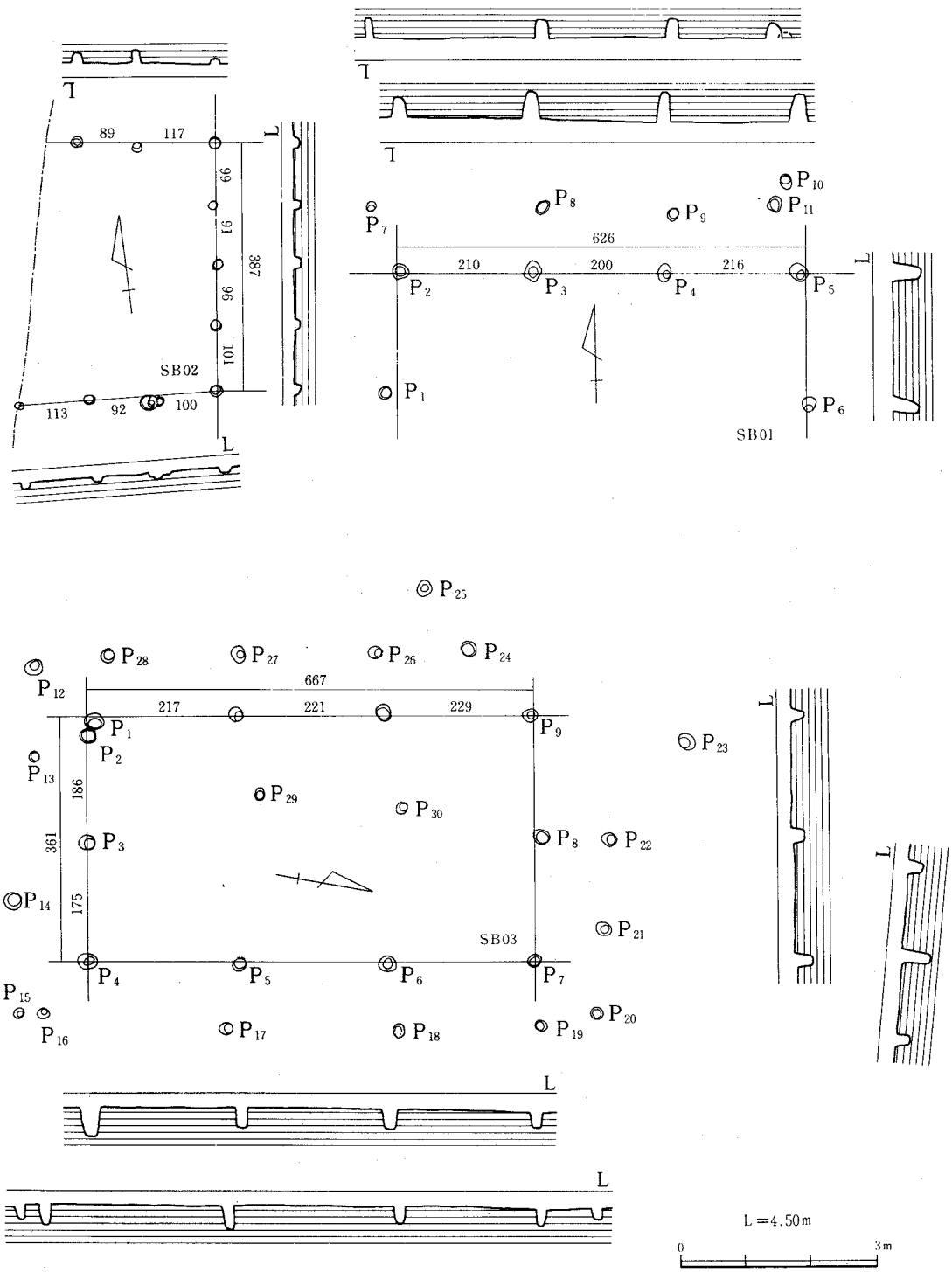


Fig.6 掘立柱建物跡実測図Ⅰ（SB01～03）（1／100）

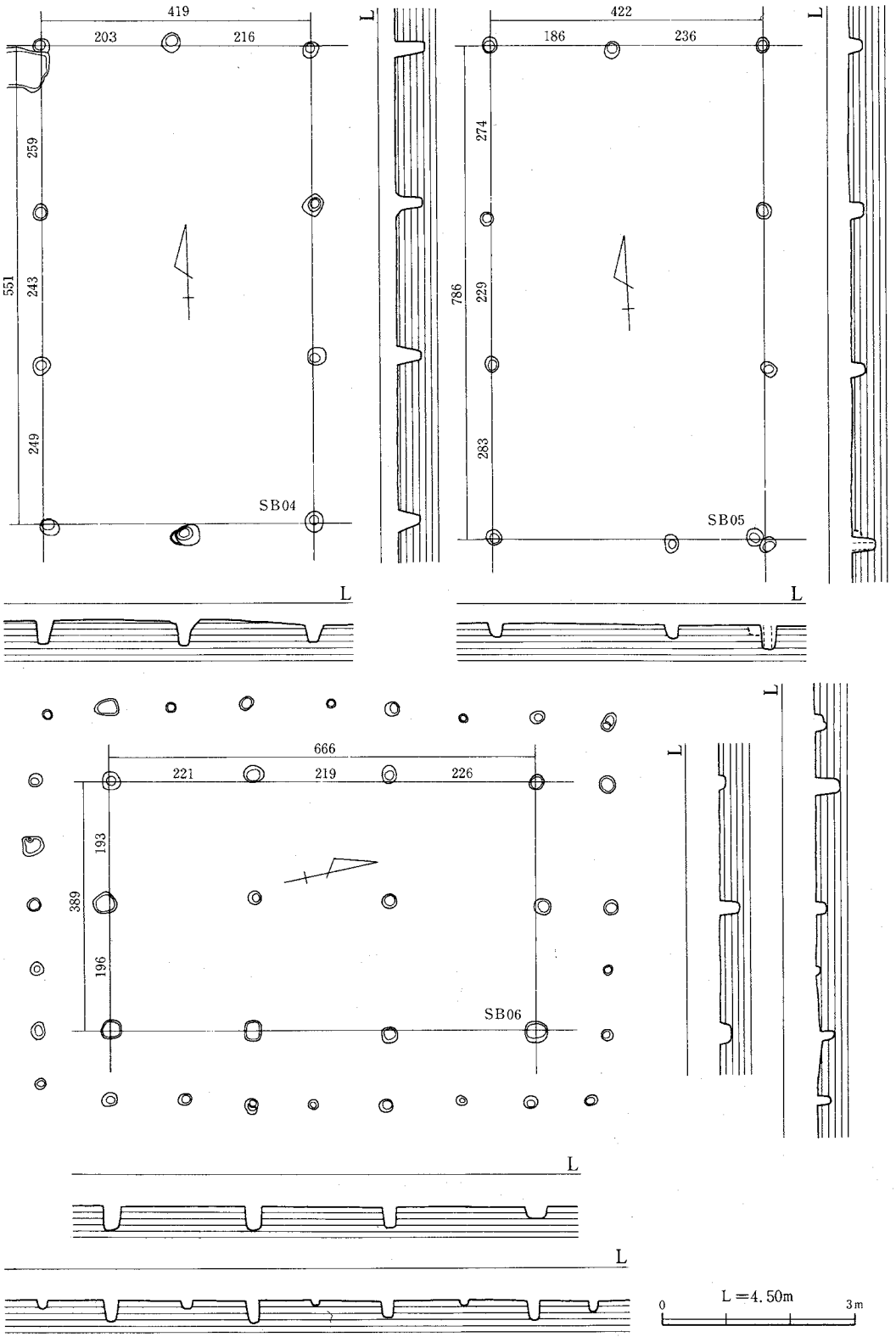


Fig.7 掘立柱建物跡実測図Ⅱ（SB04～06）（1／100）

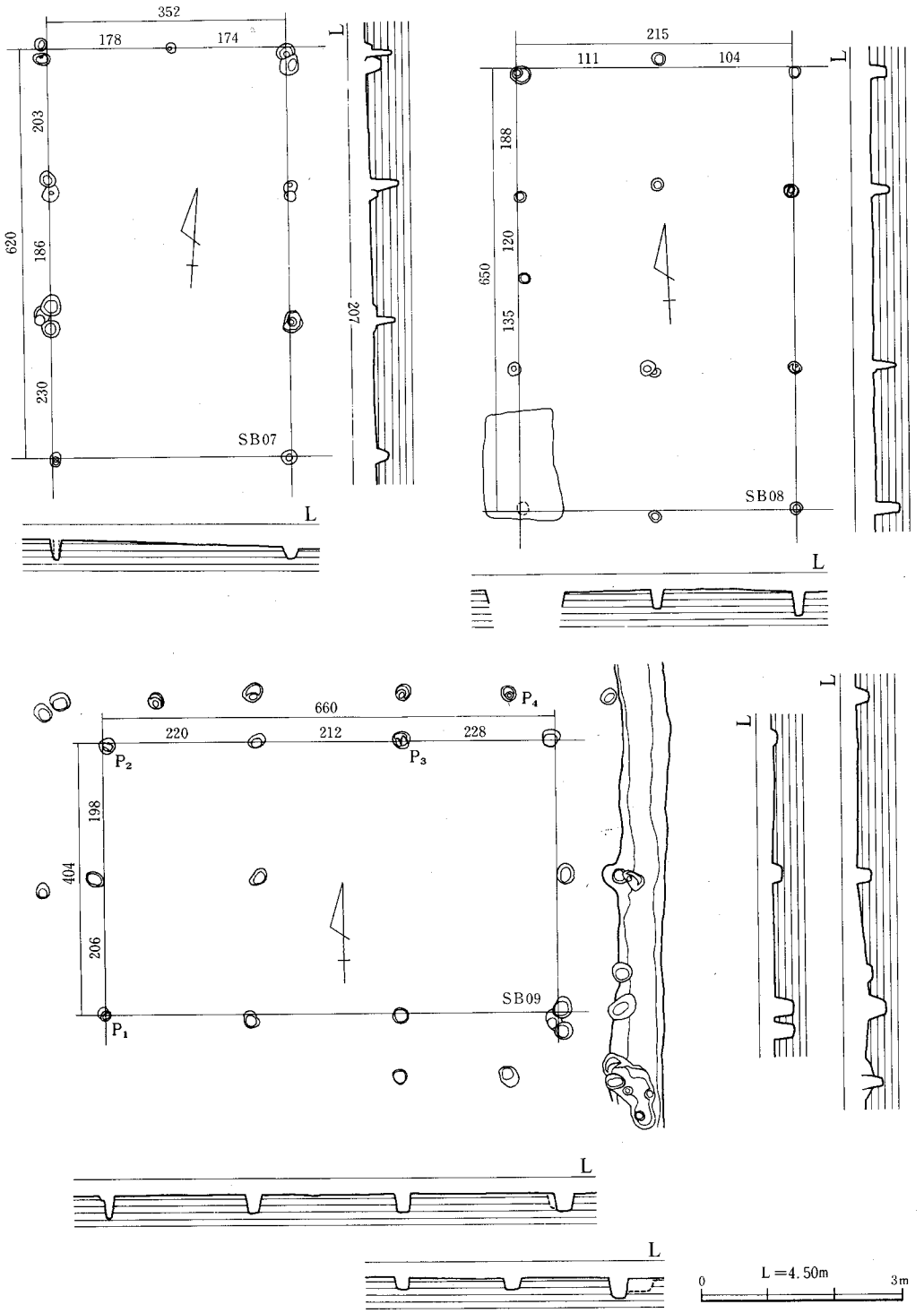


Fig.8 掘立柱建物跡実測図Ⅲ（SB07～09）（1／100）

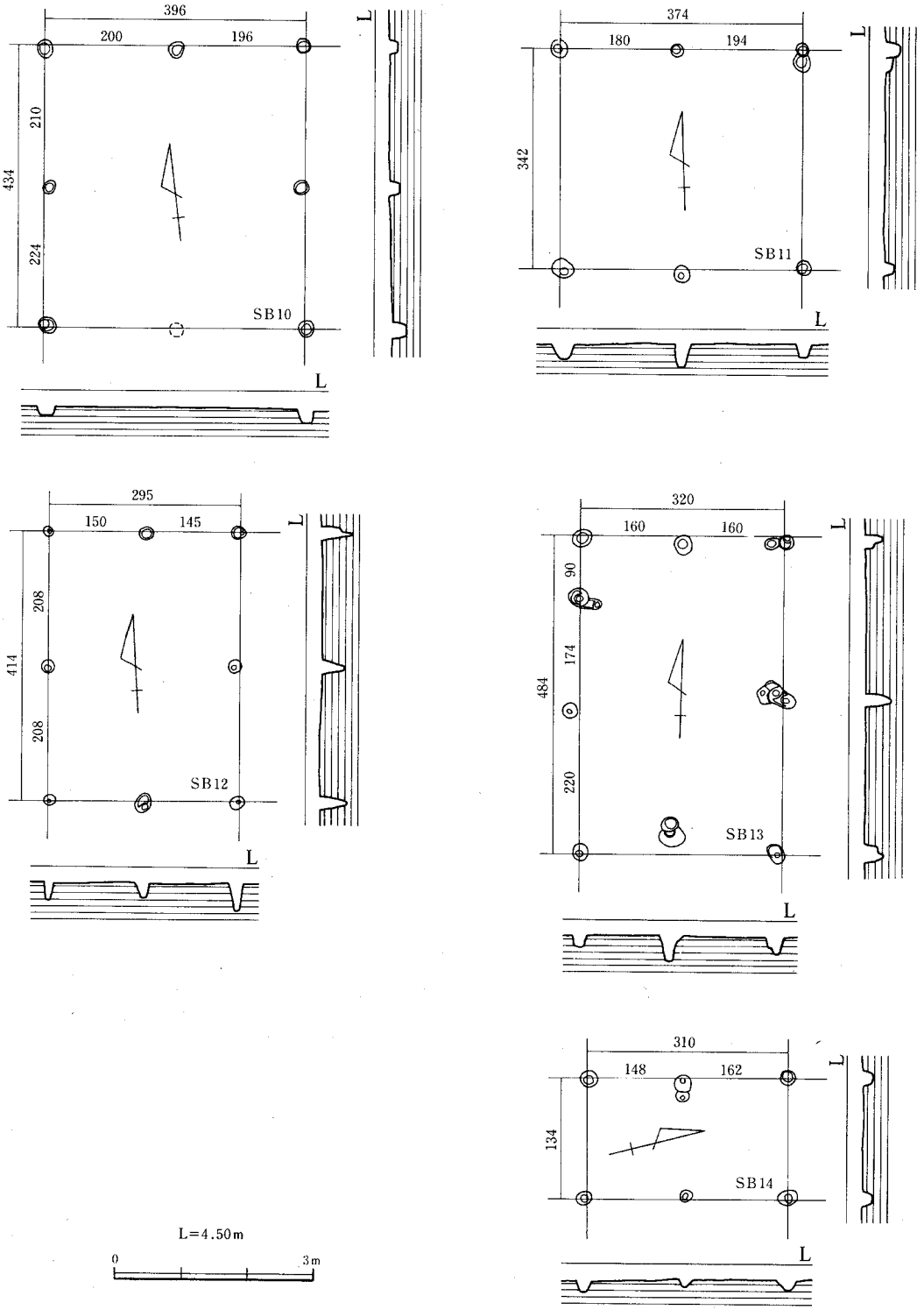


Fig.9 掘立柱建物跡実測図Ⅳ（ＳＢ10～14）（1／100）

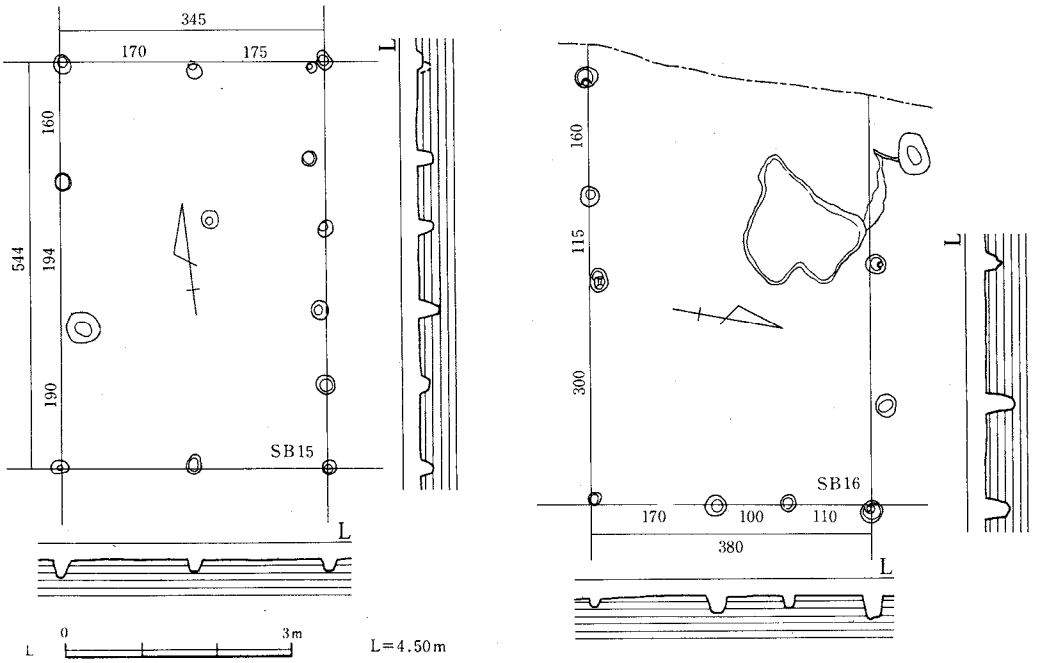


Fig.10 掘立柱建物跡実測図Ⅴ（ＳＢ15、16）（１／100）

である。柱穴の配置は概ね直線上にのるが、南側の梁間柱が外側に外れている。梁柱間204～217cm、桁で244～260cmを測る。

ＳＢ０５（Fig. 7）

調査区の中央部、ＳＢ０４の北東で検出された２×３間の南北棟である。近接するＳＢ０３（身舎部分）、ＳＢ０４より柱間が長く規模が大きい。

桁は隅柱から間柱までの柱間が長く（270～280cm）、間柱間がやや短い。梁は北側の梁間柱がほぼ中間に位置するのに対し、南側の梁間柱は東に寄る。

ＳＢ０６（Fig. 7、ＰＬ. 5）

調査区の北東部で検出された。西側の掘立柱建物が集中する地区との間に空白があり、孤立的な位置を占めている。主軸はＮ－５°－Ｅで他の南北棟と比べ大きく東にふる。

身舎は２×３間で、２本の床束柱がつく総柱建物である。柱穴はほぼ線上にのるが、北側の梁間柱がやや外側にずれている。梁行390cm（13尺）、桁行660cm（22尺）を測る。柱間は桁で220～230cm、梁で194～200cmを測る。

側柱の外側110cm離れた位置に廂柱（軒柱）が４面にわたって配列されている。側柱に対応する柱穴の掘り方は径20cm、深さ20cm程で、その中間には径15cm、深さ10cm程の小さいものを配している。後者の柱穴は北西の２箇所で欠如している。廂柱列はほぼ直線上に配されているが、隅柱が北西のものを除き、列から外れている。

ＳＢ０７（Fig. 8、ＰＬ. 5）

調査区の北西部で検出された。下記のＳＢ08、09と切り合っている。ＳＢ07、08が２×３間の南北棟であるのに対し、ＳＢ09は２×３間の身舎に４面廂（軒柱）がつく東西棟である。

梁行360cm、桁行610cmを測る。５箇所で柱穴が２個重なり、立て替えの可能性がある。桁の柱列はほぼ直線上にのる。梁は北側の間柱が外側にずれ、南側の間柱が欠如している。

ＳＢ08（Fig. 8、ＰＬ. 5）

ＳＢ07と切り合ってその西側に位置する。梁行420cm、桁行660cmを測りＳＢ07より規模が大きい。北側の梁間柱は上記の掘立柱建物と同様、外側にずれ、南西隅柱が不明で確実ではないが、南側の間柱も外に張りだすであろう。

ＳＢ09（Fig. 8、ＰＬ. 5）

調査区の北西部で、ＳＢ07、08、10と切り合って検出された。身舎が２×３間の東西棟で、梁行410cm、桁行680cmを測る。他の２×３間の掘立柱建物と同様に桁間柱が直線上にのるのに対し、梁間柱が外に張りだす。側柱の外側90cm離れて廂柱（軒柱）が配されている。北側の廂柱列は側柱からの距離が70cmで、狭まっている。東側ではＳＤ02と切り合っている。その先後関係は検出時には判断できなかったが、他の掘立柱建物と溝の切り合い関係や遺物から、柱穴がＳＤ02を切っていたものと考えられる。

P_1、P_4の柱痕から焼土が検出された。またP_2、P_3は根石をもつ。

ＳＢ10（Fig. 9、ＰＬ. 5）

ＳＢ09と切り合って検出された。２×２間の方形をなすが、南辺の間柱を欠く。３個の間柱はほぼ中間に配置されている。南、北の両辺400cm、東、西の両辺430cmを測る。

ＳＢ11（Fig. 9、ＰＬ. 6）

調査区北西際の、遺構が最も集中する部分でＳＢ11～16は検出された。これらの掘立柱建物はＳＢ16を除き規模の小さなものである。

ＳＢ11は１×２間で、南、北両辺370cm、東、西両辺340cmの方形をなす。間柱はほぼ中間に位置する。南東隅柱はＳＢ14の隅柱と重なり、柱穴が切り合っていた可能性がある。

ＳＢ12（Fig. 9、ＰＬ. 6）

ＳＢ13と切り合って検出された。２×２間の南北棟で、梁行290cm、桁行410cmを測る。間柱はほぼ中間に位置する。

ＳＢ13（Fig. 9、ＰＬ. 6）

ＳＢ12と切り合い、その南西側で検出された。２×２間の南北棟である。梁行310cm、桁行480cmを測る。間柱はほぼ中間に位置するが、南側の梁間柱が内側に入り込む。

ＳＢ14（Fig. 9、ＰＬ. 6）

ＳＥ01の西側に近接して検出された。１×２間の小規模な南北棟である。北西隅柱はＳＢ11の隅柱と重複し、柱穴が切り合っていた可能性がある。

ＳＢ15（Fig. 10、ＰＬ. 6）

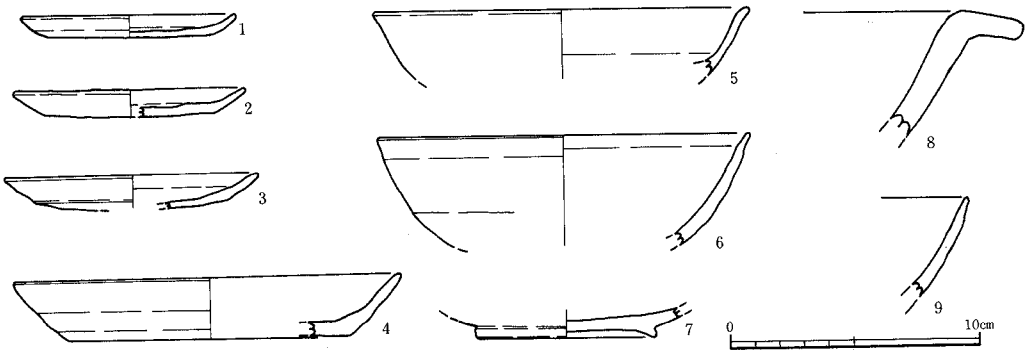


Fig.11 柱穴出土遺物実測図 (1／3)

、ＳＢ11と切り合って検出された。梁２間、西側桁３間、東側桁５間の南北棟である。梁行380cm、桁行540cmを測り、他の２×３間の掘立柱建物に比べ桁行が短い。

ＳＢ１６（Fig.10、ＰＬ.６）

調査区の北西際で検出された。西側は調査区外で未検出のため、桁行は不明である。梁行２間（370cm）の東西棟であろう。南側梁間柱の柱穴１個から根石が検出された。

遺物（Ｆｉｇ.11）

柱穴からは、土師器、黒色土器、瓦器、白磁、青磁の細片が出土した。実測可能なものは、図示した９点のみである。

1はＳＢ13北東隅柱に隣接した柱穴から出土した。口径9.2cm、器高1.2cmを測る土師皿である。底部は糸切りで板目がつく。**2**はＳＢ13北東隅柱から出土した。口径8.6cm、器高0.9cmを測る土師皿である。底部は糸切りで、板目がつく。**3**はＳＢ03廂柱から出土した。口径10.1cm、器高1.4cmを測る土師皿である。底部は丸底でヘラ切りである。**4**はＳＢ16北東隅柱から出土した土師の杯である。口径は細片の為誤差が大きい可能性があるが、復元径15.2cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切り。**5**はＳＢ06の廂柱から出土した。復元口径15.0cmを測る黒色土器である。**6**は調査区北西部の柱穴から出土した瓦器椀である。復元口径14.8cmを測る。口縁端部がやや外反し内外面黒変している。**7**はＳＢ04桁間柱穴から出土した土師器椀の底部である。高台口径7.2cm、断面三角形を呈す。**8**はＳＢ09北東隅柱穴から出土した土鍋片である。砂粒はあまり含まず、しまっている。**9**はＳＢ13北東梁柱穴から出土した。龍泉系青磁椀である。

(2) 井戸

調査区北西部から中央部にかけて３基検出された。前述の掘立柱建物は、この３基の井戸の外側をとり囲むように配置され、内側では遺構は皆無に近い。

ＳＥ０１（Fig.12、ＰＬ.６）

調査区北西部で検出された。検出面は明黄褐色粘質土であるが、20cm下では砂質土にかわる。

掘り方の平面プランは径130cm円形を呈す。断面は最下底から40cm上までは筒形で、そこから大きく広がる漏斗状を呈す。最下底までの深さは120cmを測る。井戸枠は遺存していなかったが、断面や土層から径50～60cmの井戸枠が存していたと推測される。

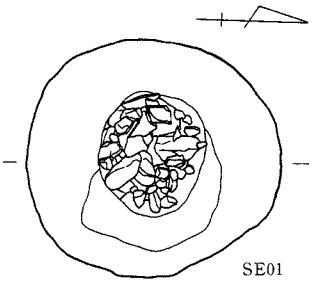
最下底からは多くの礫に混じり砥石や土器片が出土した。礫や砥石は廃棄されたものと考えられるが、火熱を受け赤変している。

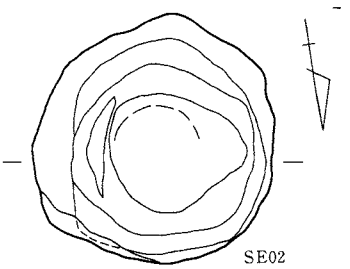
ＳＥ０２（Ｆｉｇ.12、ＰＬ.７）

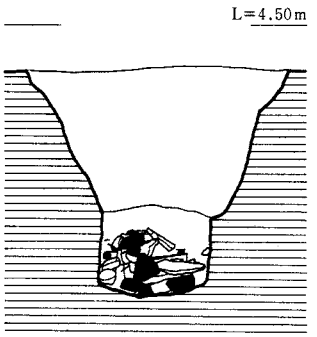
調査区の西側中央部で検出された。掘り方の平面プランは径１ｍの円形を呈す。深さは115cmを測る。断面は南壁が崩壊してオーバーハングしているものの概ね円筒形をなす。井戸枠の痕跡は検出できなかった。中層から最下層にかけて礫片、石鍋や土師器杯等の遺物が出土した。

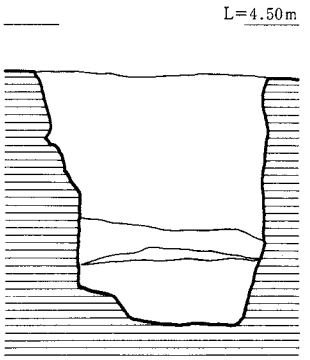
ＳＥ０３（Ｆｉｇ.12、ＰＬ.７）

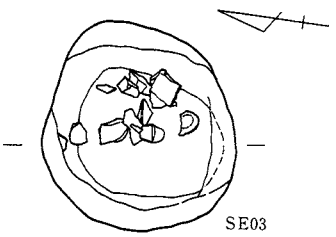
調査区の北西部、ＳＥ01から東15ｍ、ＳＥ02から北東12.5ｍの位置で検出された。掘り方の平面プランは径130cmの円形を呈す。深さは135cmを測る。断面は地山が粗砂に変わる80cm下までややすぼまり、以下、屈曲して直におちる。埋土は図示した１～４層と以下の層に概ね分かれる。８、９層は粘質土、12層は粗砂層である。９層下部で現在湧水してくる。土層断面からは井戸枠の痕跡は見出だせなかったが、最下底の粗砂に、断続的であるが径50cm程円形に黒色粘土が残っていた。礫や遺物の混入は少ない。

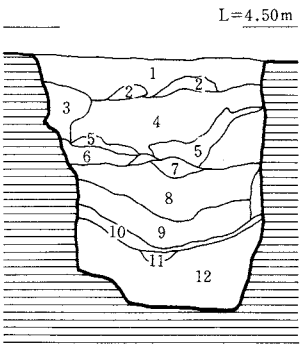


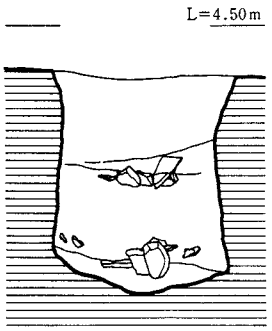












SE02の土層所見

1．黒（褐）色土。
2．明黄褐色～褐色粘質土。わずかに黒色土、灰白色粗砂含む。
3．褐色粘質土混り黒色土（褐色粘質土は小ブロック状に含む）
4．黒色土（粘性は弱い）
5．灰白色粗砂（わずかに明黄褐色粘質土含む）
6．7．黒色土、部分的にわずかに粗砂明黄褐色粘質土含む。
8．明黄褐色粘土混り淡灰褐色粘土。ブロック状にまだらに混り合う。
9．灰褐色粘土。粗砂状となる部分が多い。この層下部では湧水。明黄褐色粘土の小ブロックを少し含む。
10．黒色粘土、黄褐色粘土混り粗砂。
11．灰褐色粘土。
12．灰褐色粗砂。

0　2m

Fig.12 井戸実測図（1／40）

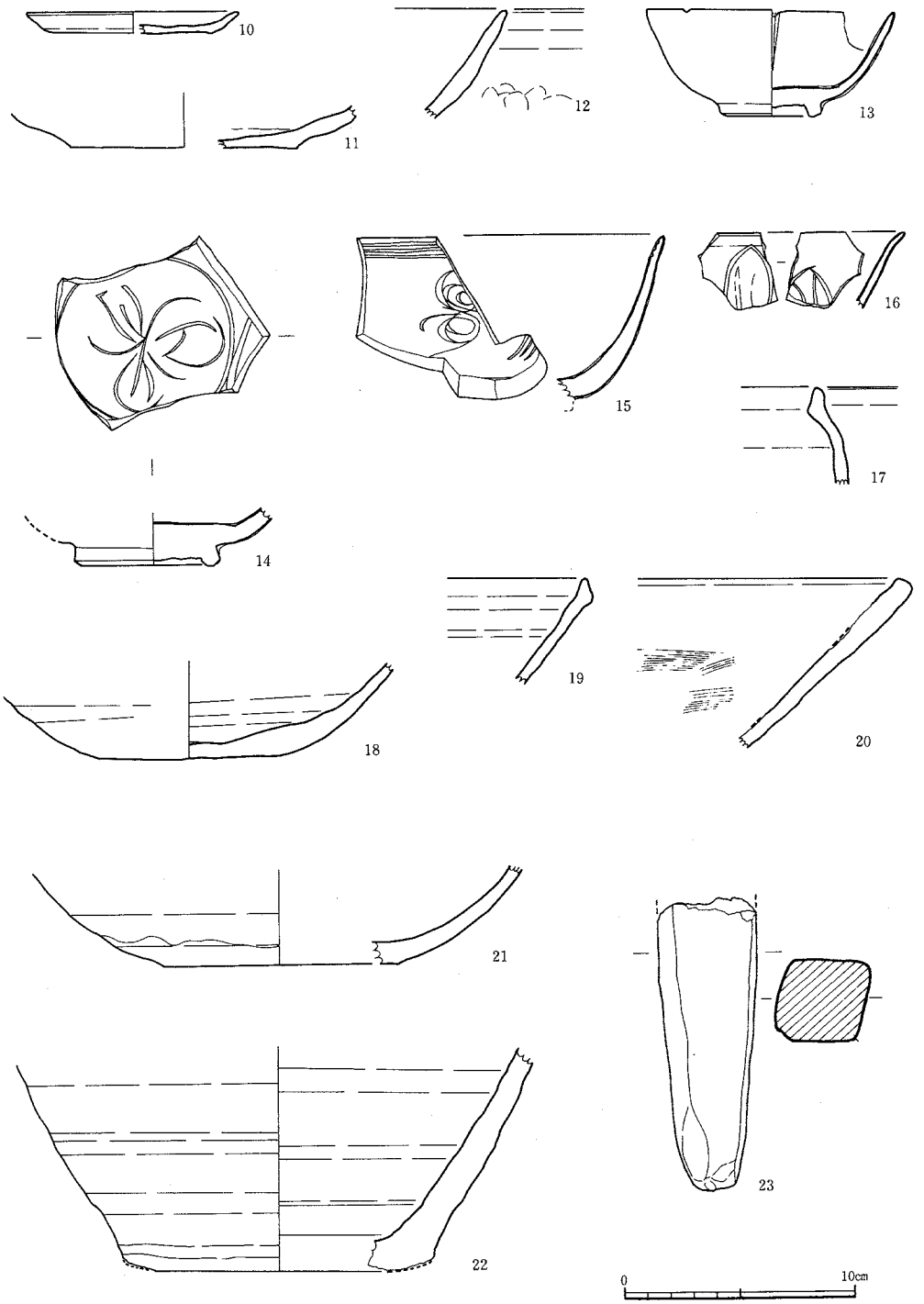


Fig.13　ＳＥＯ１遺物実測図（１／３）

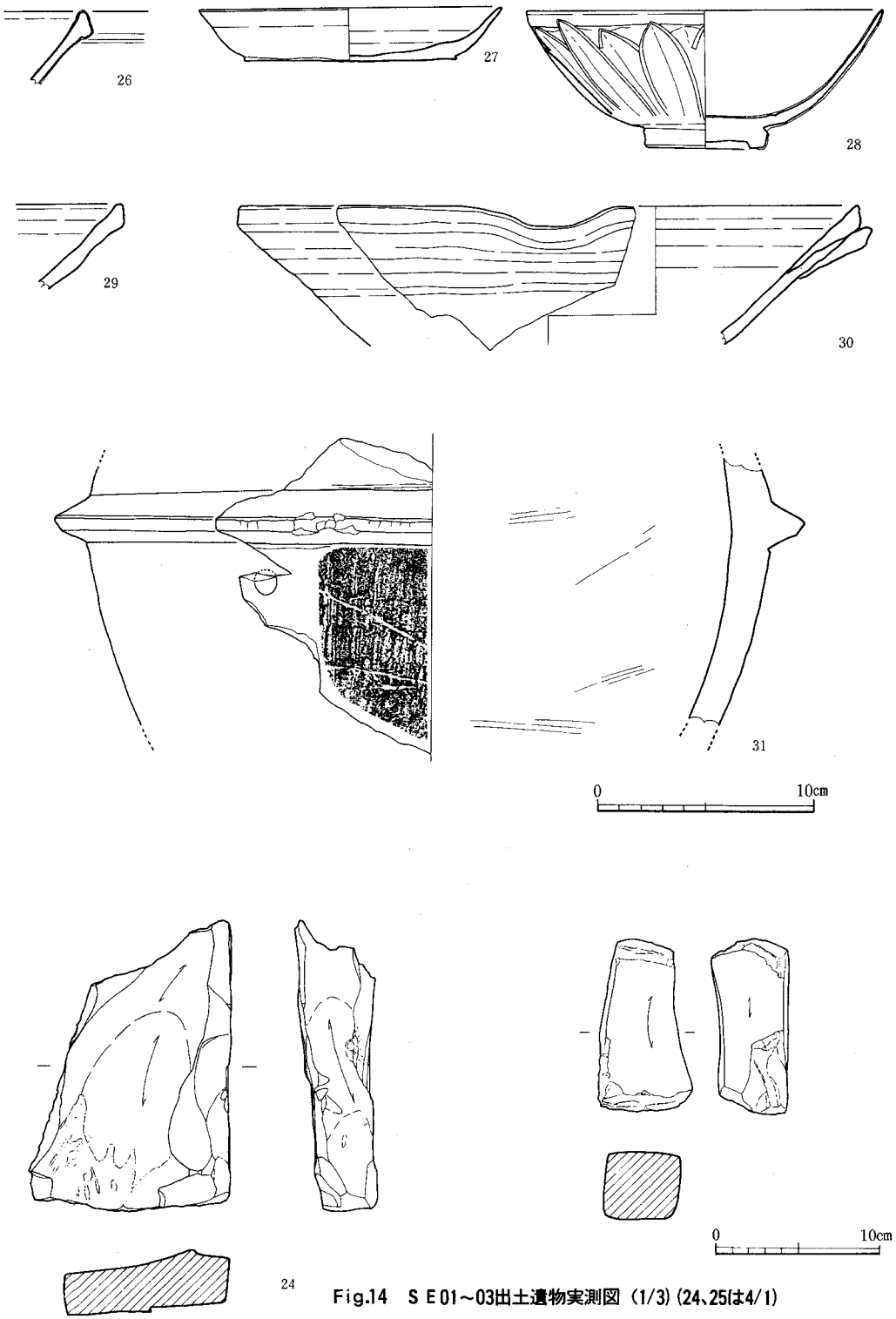


Fig.14　ＳＥ01～03出土遺物実測図（1/3）（24、25は4/1）

遺物

ＳＥ０１（Ｆｉｇ.13、14、ＰＬ.19）

図示したものは井戸枠内の埋土中から出土した。

10は土師皿である。口径9.2cm、器高0.9cmを測る。外底部に糸切り痕とわずかな板目圧痕が残る。**11**は土師質で、鉢の底部と考えられる。底径9.8cmを測る。体部は大きく外側に開き、割れ口近くでやや内に屈曲する。底部は糸切りで、板目が明瞭に残る。外面ヨコナデ、内面ナデを施す。色は明黄褐色を呈す。**12**は瓦器椀である。外面中位下に指頭痕がのこる。**13**は龍泉窯系の青磁小椀である。口径10.6cm、器高4.7cm、高台径4.3cmを測る。口縁部は輪花で、内面に推定５本の白堆線が施される。釉は高台畳付から高台内側にかけて部分的に付着し、底部以外の全面に厚く施される。釉色は淡緑色を呈す。**14**は龍泉窯系青磁椀である。高台系6.3cmを測る。内面見込みに劃花文が刻まれている。釉色は青緑色を呈す。**15**は龍泉窯系青磁である。内面の口縁と体部に刻まれた３本の平行線が文様を区画する。釉色はやや黄色味がかり発色は良くない。**16**は龍泉窯系青磁である。口縁部は外反する。外面の蓮弁は鎬が不明瞭で単弁である。内面には折枝文が刻まれている。器厚は、3.5mm程で薄く、小椀の可能性がある。釉色は青緑色で、氷裂を有す。**17**は褐釉陶器である。釉色は黄色味がかった茶緑色、断面は淡赤褐色を呈す。胎土は緻密で黒粒を若干含む。**18**は須恵質の捏鉢底部である。東播系であろう。底径8.0～8.4cmを測る。外面底部は未調整でアバタ状である。色は灰色を呈し、焼成は軟質である。胎土には砂粒を多く含む。**19**は土師質の捏鉢である。東播系の模倣か。胎土は砂粒を少し含むが密である。外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ナデを施す。**20**は土師質の捏鉢である。体部は直線的に延び、口縁にかけて肥厚する。内面の口縁端部下にはヨコハケを施される。口縁端部および外面の上位はヨコナデを施し、外面中位下は指頭痕の起伏が目立つ。色は淡黄褐色。胎土には砂粒を多く含む。**21**は褐釉陶器である。底部径は推定で10.0cmを測る。底部から体部の一部にかけては露胎で回転ヘラ削り痕が認められる。釉色は風化して黄色味がかった褐緑色を呈す。露胎部分と断面は赤褐色を呈す。胎土は緻密である。**22**は釉が内外面剥落しているが、褐釉陶器であろう。底部径13.2cmを測る。釉色は不明であるが、現状では外面アズキ色、内面赤褐色がかる灰色を呈す。断面は灰色で、胎土には砂粒を多く含む。**23**は土製の脚部である。断面は方形で、端部は丸く収める。色は明黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み粗い。**24**は砥石である。Ａ面、Ｂ面が砥面で、Ａ面が研ぎこまれ中凹むが、Ｂ面は平坦である。中砥ほどの肌理である。玄武岩製か。**25**も砥石である。４面ともに研ぎ込まれている。

ＳＥ０２（Ｆｉｇ.14）

出土遺物が少なく図示できるのは１点のみである。**26**は玉縁の白磁椀である。釉色は青みがかった灰白色を呈す。胎土に黒粒を含む。

ＳＥ０３（Ｆｉｇ.14、ＰＬ.19）

27は土師器の杯である。口径13.8cm、器高2.4cm、底径9.9cmを測る。底部には糸切り痕と板

目がのこる。**28**は龍泉窯系の青磁椀である。外面に鎬蓮弁を施す。釉色は黄色味がかる緑褐色を呈す。**29**は須恵質の鉢である。東播系であろう。**30**は土師質の片口である。色は褐色、内外面にススが付着し、２次火熱を受けている。**31**は滑石製の石鍋である。胴部最大径は復元で31.4cmを測る。鍔の下２cm程の箇所に穿孔を有す。

(3)　土壙（Fig.15、16、PL.８～13）

土壙12基は掘立柱建物が集中する調査区北西部で検出された。ＳＫ01～03は50から60cmの至近距離に位置する。ＳＫ01と02の主軸は並行し、ＳＫ03は01の北側で主軸を直行させる。ＳＫ01～03は掘立柱建物とは切り合っている。土壙の性格はＳＫ01が土壙墓と考えられる以外は不確定である。

ＳＫ０１　掘り方の平面プランはいびつな方形を呈す。短辺は北側125cm、南側85cm、長辺は東側130cm、西側145cmを測る。深さは20cm程である。基底面は凹凸が著しい。南東コーナーの位置に土師皿３個、杯３個体がほぼ完形で出土した。これらの遺物は基底面から10cm浮いているが正置に近い状態であった。他に刀子１、鉄釘（？）１が出土した。埋土は暗褐色土で、地山の明黄褐色砂質土との区別は容易であった。土層断面からは２枚の層がレンズ状に堆積するのが見出だせたが木棺墓の痕跡は認知できなかった。

ＳＫ０２　ＳＫ01と主軸をほぼ同じくして、その東側約50cmの位置で検出された。平面プランは台形状を呈す。北側と南側の短辺はほぼ同じ90cm、長辺は東側130cm、西側105cmを測る。深さは３cm程でかなり削平を受けている。基底面には凹凸がみられる。

ＳＫ０３　ＳＫ01の北側約60cm離れて、長軸をＳＫ01と直行させる。平面プランは明瞭なコーナーをもたず隋円形を呈す。長軸220cm、短軸150cmを測る。深さは20cm程である。西側壁面はゆるやかに落ちてゆき下端が不明瞭になっている。基底面には凹凸が多い。土層断面からは暗～黒褐色土がレンズ状に堆積するのが認められたのみである。

ＳＫ０４　調査区の北西部、調査区境界際で検出された。平面プランは方形に近い。長軸110cm、短軸90cmを測る。壁面はなだらかに落ち下端は不明瞭である。基底面はやや凹凸があるものの平坦である。

ＳＫ０５　掘立柱建物が集中する調査区の北西部から北側にやや離れて検出された。平面プランは径190cmの円形を呈す。壁面が緩やかに落ち断面は丸底を呈す。中央の最深部で30cmを測る。基底面に径90cm程の不整な円形落ち込みがある。

ＳＫ０６　調査区の北西部でＳＤ04と切り合って検出された。径約130cmの円形を呈す。深さは10cm程である。

ＳＫ０７　調査区の中央北側で検出された。ＳＢ07～09わずか北側に位置する。ＳＫ08を切る。平面プランは隋円形を呈す。長軸100cm、短軸70cmを測る。壁面の立ち上がりは西側が緩やかであるのに対し東側では急である。基底面はほぼ平坦であるが、一部不整形に窪む。埋土

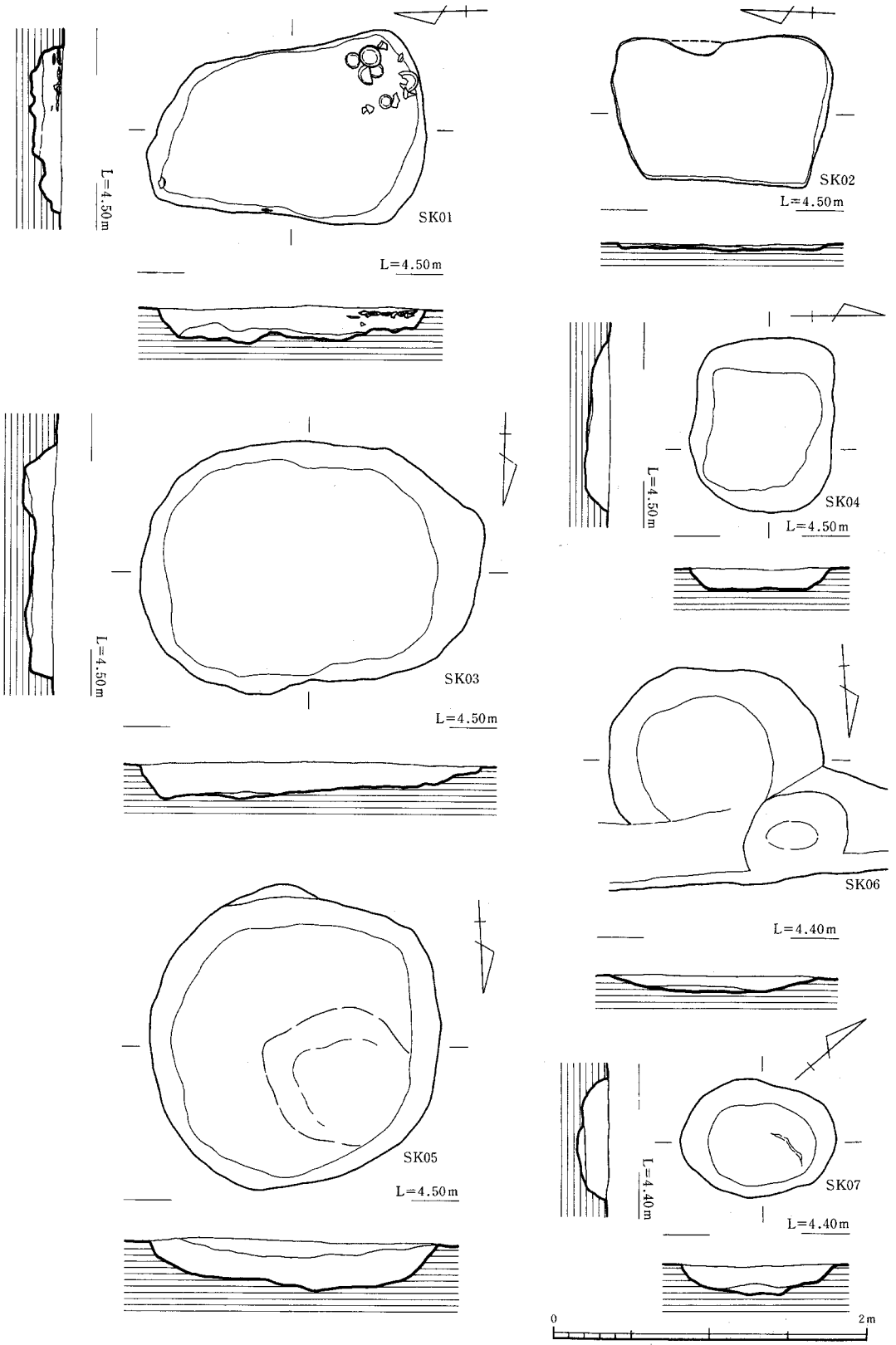


Fig.15 土壙実測図Ⅰ（SK01～07）（1／40）

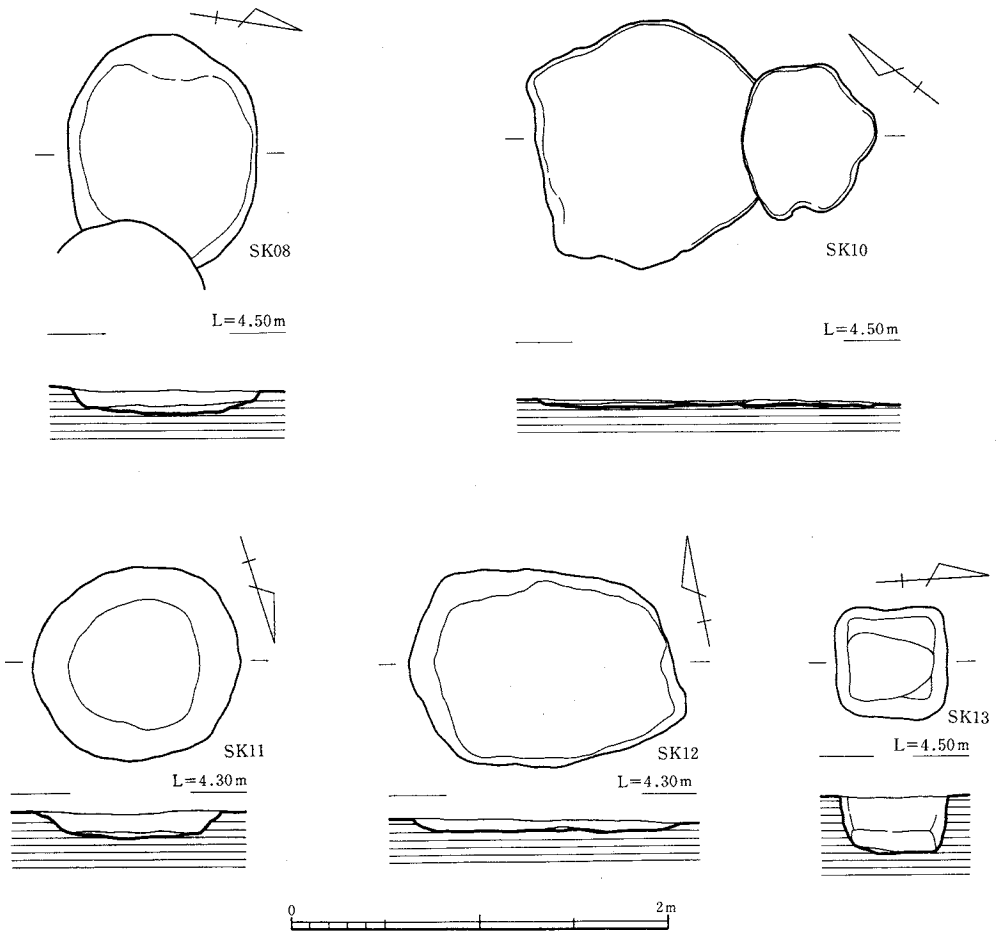


Fig.16 土壙実測図Ⅱ（ＳＫ08～13）（1／40）

中に焼土を含む。近くのＳＢ09の柱穴埋土中にも焼土を含む。

ＳＫ08 ＳＫ０７に切られて検出された。平面プランは隋円形を呈す。長軸は復元で130cm、短軸100cmを測る。深さは10cm程である。西側壁面の立ち上がりは緩やかで下端は不明瞭になっている。基底面はほぼ平坦である。

ＳＫ09、ＳＫ10 調査区中央北側で検出された。ＳＫ10との埋土の違いは認められ、切りあいがあるものと考えたが基底面までの深さは同じで、ともに浅く４cm程である。疑問があるが一応別の遺構として報告する。平面プランが極めて不整形を呈すのは削平を受け遺存が悪いことによる。基底面は凹凸が著しい。

ＳＫ１１ 調査区の中央部で検出された。平面プランは径110cmの円形を呈す。壁面の立ち上がりは緩やかで、基底面は丸底状である。中央の最深部まで15cmを測る。

ＳＫ１２ 調査区の中央部で検出された。平面プランはいびつな方形を呈す。主軸長140cm、

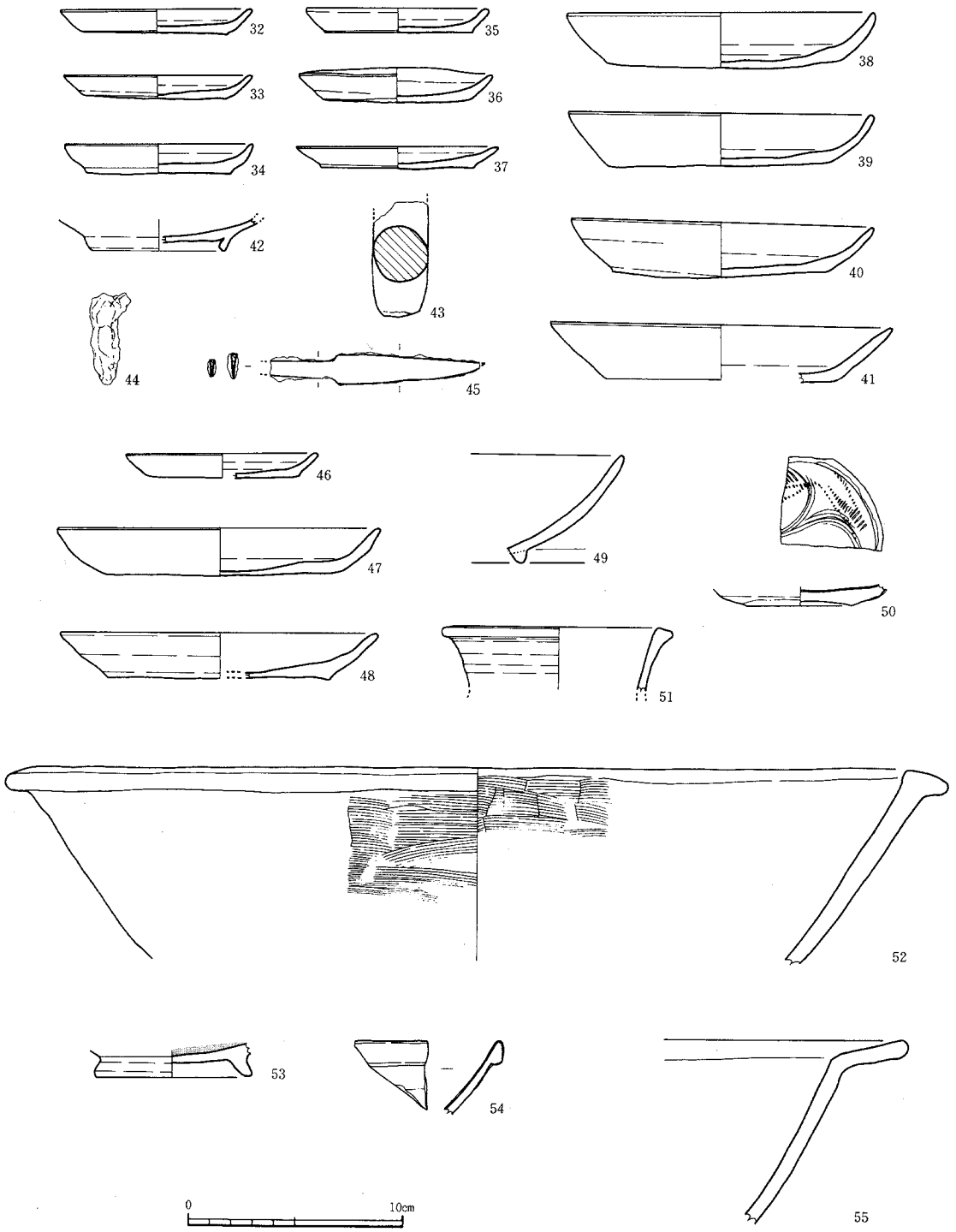


Fig.17 土壙出土遺物実測図（1／3）

幅105cmを測る。深さは５cmで極めて遺存が悪い。上端、下端ともに不明瞭である。基底面は平坦に近い。

ＳＫ１３　調査区北西部、ＳＸ01の西側で検出された。１辺が60cmの隅丸方形の平面プランである。深さ30cmを測る。柱穴とも考えられたが、周辺に同様の遺構は検出されなかった。埋土は中世遺構と異なり黒色土である。

遺物（Ｆig.17、ＰＬ.18、19）

ＳＫ０１

32～37は土師皿である。32、33、36は完形である。口径は35が最小で8.4cm、37が最大で復元口径9.4cmを測る。その他は口径8.7～8.9cmを測る。底部はすべて糸切りで、34、35以外には板目が残る。体部は35が厚く、37は外に開く。**39～41**は土師器の杯である。39～40は完形である。口径は41が復元で15.8cmと大きい他は14.2cm程を測る。器高は2.3～2.6cmを測る。体部は39～40がやや内湾ぎみに外方へ延びていくのに対し、41は直線的に長く延びる。底部は41は不明であるが、他は糸きりで板目が残る。**42**は瓦器椀底部である。高台径6.2cmを測る。**43**は土師質の脚？である。端部は丸く絞り込む。断面は2.5cmの円形を呈す。**44**は鉄釘か。遺存長4.5cmを測る。**45**は刀子である。刃部長は復元7.0cmを測る。背部は直線的である。

ＳＫ０３

46は土師皿である。口径8.8cm、器高1.1cmを測る。底部は糸きりで板目が残る。47、48は土師器の杯である。口径は復元で**47**が14.6cm、**48**が14.8cmを測る。器高は2.1cm。底部は両者ともに糸きりで48には板目が残る。**49**は瓦器椀である。器高5.2cmを測る。**50**は同安系青磁皿である。底径4.8cm。**51**は褐釉陶器である。復元口径10.8cmを測る。

ＳＫ０４、０５、０７、１０

52はＳＫ04、53はＳＫ05、54はＳＫ07、55はＳＫ10から出土した。**52**は土鍋である。復元口径43.8cmを測る。内外面に細かなヨコハケを施す。**53**は黒色土器である。高台径7.2cmを測る。**54**は白磁椀である。**55**は土鍋である。胎土は硬くしまる。口縁端部はやや肥厚する。

(4)　溝

調査区のほぼ全面にわたって溝は検出された。分岐するものは別個にかぞえ総数は26になる。大溝（ＳＤ06）以外の溝の形状は概ね幅70cm、深さ15cm程の小溝である。掘立柱建物を含めた切り合い関係は以下に示す通りである。

ＳＤ01　→ＳＢ01、ＳＢ03　　ＳＤ02　→ＳＢ09　　ＳＤ04　→ＳＤ03

ＳＤ05　→ＳＢ06、ＳＤ07　　ＳＤ06　→ＳＤ02、03、05、07

（古　→新を表す。並列したものは先後関係を示さない）

切り合い関係からは溝が掘立柱建物より古く、溝のなかではＳＤ06（大溝）が最も古い。

溝はその方向によって分類できる。

東西ないし南北……ＳＤ02、04、07、09

Ｎ－45°－Ｗ　……ＳＤ01、03

Ｎ－30°－Ｗ　……ＳＤ05、07、20

上述の分類は調査区内における直線部分の方向を示したものにすぎず、ＳＤ07にみられるように分岐して方向を変え２つの区分に属するものもある。

ＳＤ01　調査区の北西部で検出された。調査区中央部ではＮ－45°－Ｗの方向で直線的に走り、北側で南に方向を変える。幅70cm、深さ30cmを測る。断面Ｕ字形。ＳＢ01、ＳＢ03の柱穴に切られる。

ＳＤ02　調査区西部中央部のＳＤ01近くから始まりＮ－70°－Ｅで北上する。中央部で方向を変えほぼ南北に走る。北側のＳＤ04との交差付近で溜り状に広がりそこから方向をやや西にふる。幅70cm、深さ約10cmを測る。東西に走行するＳＤ04の切り合いは識別できなかった。他の切り合い関係は上述の通りである。

ＳＤ03　調査区の北側中央部で検出された。ＳＤ07と分岐しＳＤ01とほぼ同じ方向をとる。ＳＤ01との距離は約85cm。幅80cm、深さ16～35cmを測る。ＳＤ04、06を切る。

ＳＤ04　調査区の北側を東西に走り、中央部付近で南東に折れる。ＳＤ03と07の分岐点付近で途切れるがその延長方向にＳＤ07が続く。幅70cm、深さ12～20cmを測る。

ＳＤ05　調査区の北東部で検出された。北側末端はＳＤ06南岸付近で削平され途切れる。幅40cm、深さ27～36cmを測る。

ＳＤ06（大溝）　調査区北側で検出された。現道路に平行しながらＮ－83°－Ｅの方向で走行する。幅5.3～5.8m、深さ約30cmを測る。南壁はＳＤ04付近から緩やかに落ちていくのに対し、北壁の立ち上がりは比較的急である。しかし調査区東際では両壁面ともに緩やかな立ち上がりに変わる。基底面は平坦に近いが東半では凹凸が目立つ。基底面レベルは調査区西壁際で3.65m、東際で3.40mを測り、調査区内において25cmの比高差を示す。埋土は暗褐色土で、下層に黒褐色土や砂層が東半を中心にみられる。

ＳＤ07～12　調査区東際中央部で細かく分岐する。（ＳＤ10～12）更に北側で北に方向を変えＳＤ03、ＳＤ09に分岐する。ＳＤ09はほぼ東に走る。

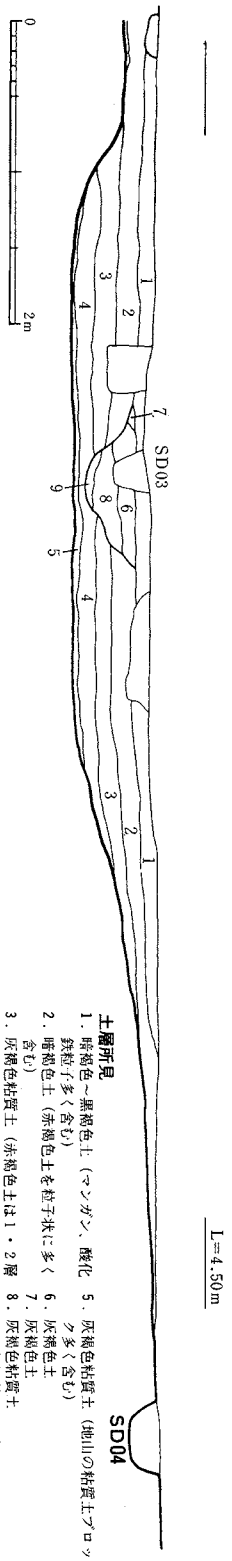


Fig.18 ＳＤ06土層断面図（1／50）

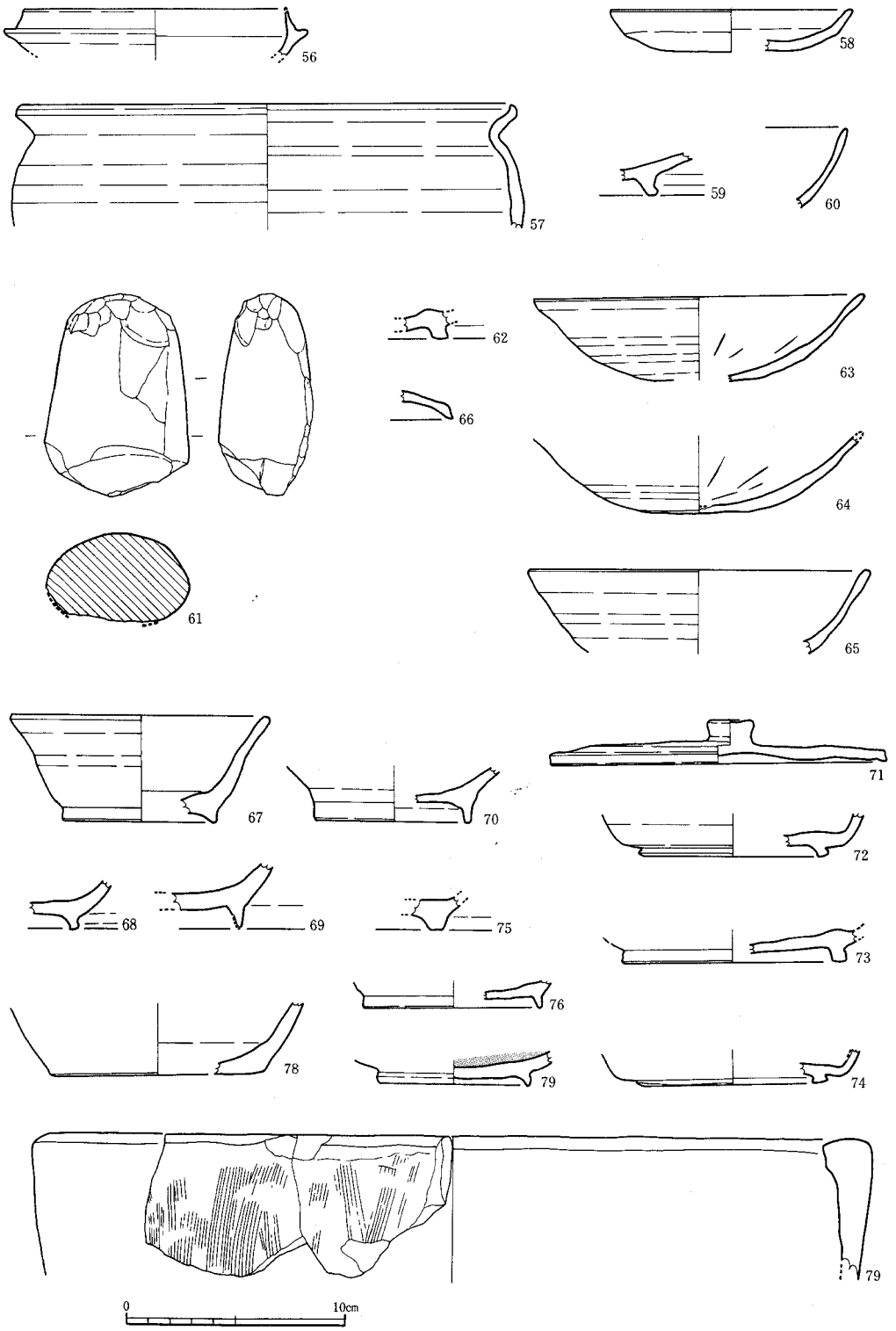


Fig.19　溝出土遺物実測図Ⅰ（ＳＤ01～04. 06）（1／3）

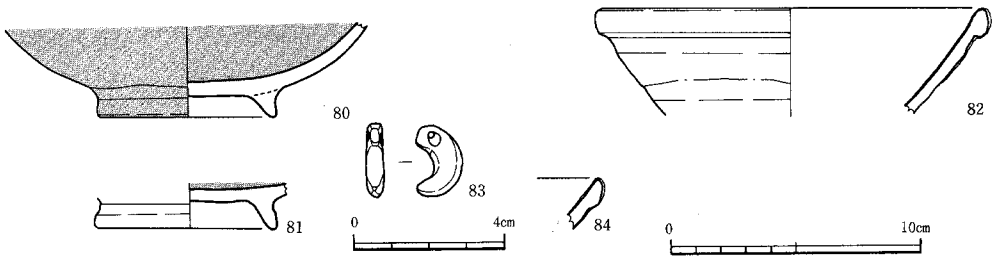


Fig.20 溝出土遺物実測図Ⅱ（ＳＤ07～11）（1／3）（83は1／2）

ＳＤ１３～１６　調査区南側中央部で検出された。深さ４cmと浅く、削平を受け途切れる。ＳＤ13は砂が埋まった円形の穴が連続するもので、水流による開析を受けたものと考えられる。

ＳＤ２０～２１　調査区Ⅲ区（南側道路以南）で検出された。両溝の交差点でＳＤ21は南東に折れ、ＳＤ20と同じ方向をとる。

遺物

ＳＤ０１～０５

56、57はSD01、58～60はSD02、61はSD03、63～65はSD04、66はSD05から出土した。**56**、**57**は須恵器である。復元口径は56が12cm、57が22.8cmを測る。**58**は瓦器皿である。口径11.0cm、器高1.9cmを測る。体部下位に指頭痕が残る。**59**、**60**はＳＤ02と04の交差付近の溜り状から出土。ともに土師器椀である。**61**は石斧である。風化が著しい。**62**は須恵器の高台部である。**63**、**64**は土師器の丸底杯である。63は口径15.0cm、器高3.9cmを測る。63、64ともに内面にコテアテ痕が残る。**65**は土師器椀である。復元口径15.5cmを測る。**66**は須恵器坏蓋片である。

ＳＤ０６

67～70は土師器杯である。67は復元口径11.8cm、器高4.8cmを測る。体部中位から外反する。70は高台径7.2cmを測る。高台が直立する。**71～74**、**76**は須恵器である。71は口径15.4cm、器高2.0cmを測る。**75**は土師器の高台部である。断面台形を呈す。**77**は黒色土器である。上層から出土し、この遺構に伴うものか疑問である。高台径6.9cmを測る。**78**は土師器杯である。**79**は復元口径38.4cmを測る。外面タテハケ、内面ナデか。色を黄灰色を呈し、軟質。

ＳＤ０７、１１

80～83はＳＤ07、84はＳＤ11から出土。**80**は黒色土器。高台径6.8cmを測る。**81**は黒色土器。**82**は白磁椀。口径15.6cmを測る。**83**は硬玉製勾玉である。厚さ4.5mmで扁平。**84**は白磁椀。

(5) その他の遺構

弥生時代の溝状土壙（ＳＸ01）、不整形土壙、池状遺構（旧河川か）についてここに記す。

ＳＸ０１（Ｆｉｇ.21、ＰＬ.16）

調査区の北西部で検出された。長さ6.10m、幅は北東端で最大120cmを測り、狭めながら幅50cmの南西端へ続く。両端部付近の基底面は高くなりテラス状になる。中央部の基底面までの深さは40cmを測る。断面は舟底状を呈す。埋土中からは多数の遺物が出土した。遺物のほとんどは１層の黒色腐植土から出土し、下層からは皆無にちかい。

ＳＸ０２～０４

調査区の北西際で検出された。検出時の平面プランは不明瞭で、深さは５cmと極めて浅い。基底面は凹凸が著しい。

池状遺構（旧河川？）（付図. ＰＬ.17）

調査区の南東部で検出された。調査区内での平面プランは弧状をなす。最深部は50cmを測る。付図に示した土層図の第４層は調査区内の検出面をほぼ全面にわたって覆う。この層の下位から落ち込む。第14層は黒色有機土で最下層としてほぼ全面に堆積する。埋土中には砂層をほとんど挟まず粘質土ないし粘土層が堆積する。

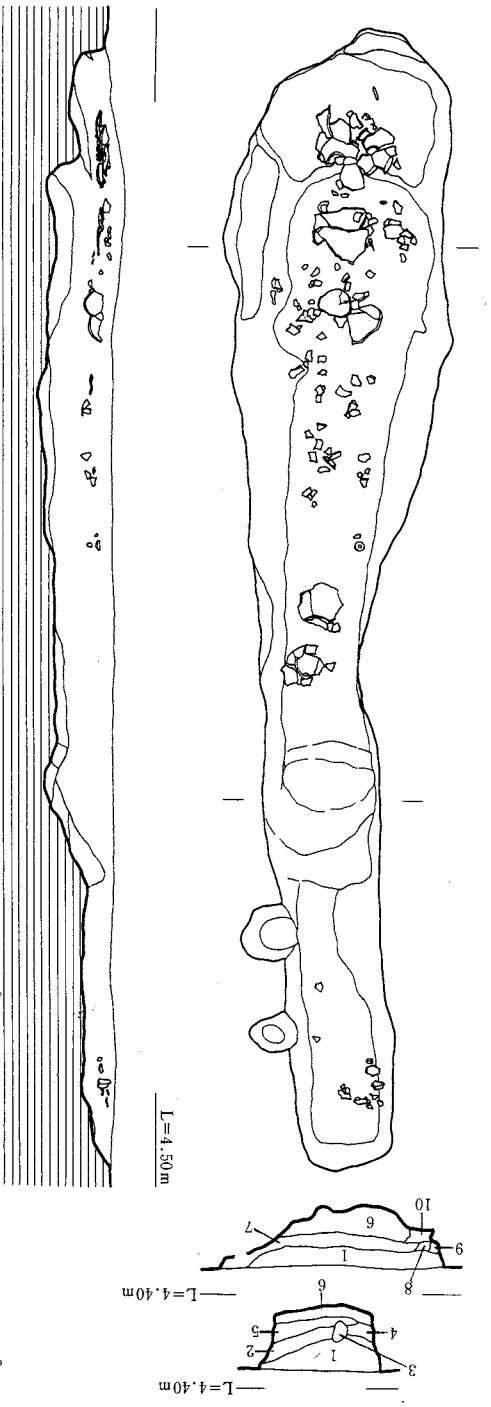


Fig.21 ＳＸ01実測図（１／40）

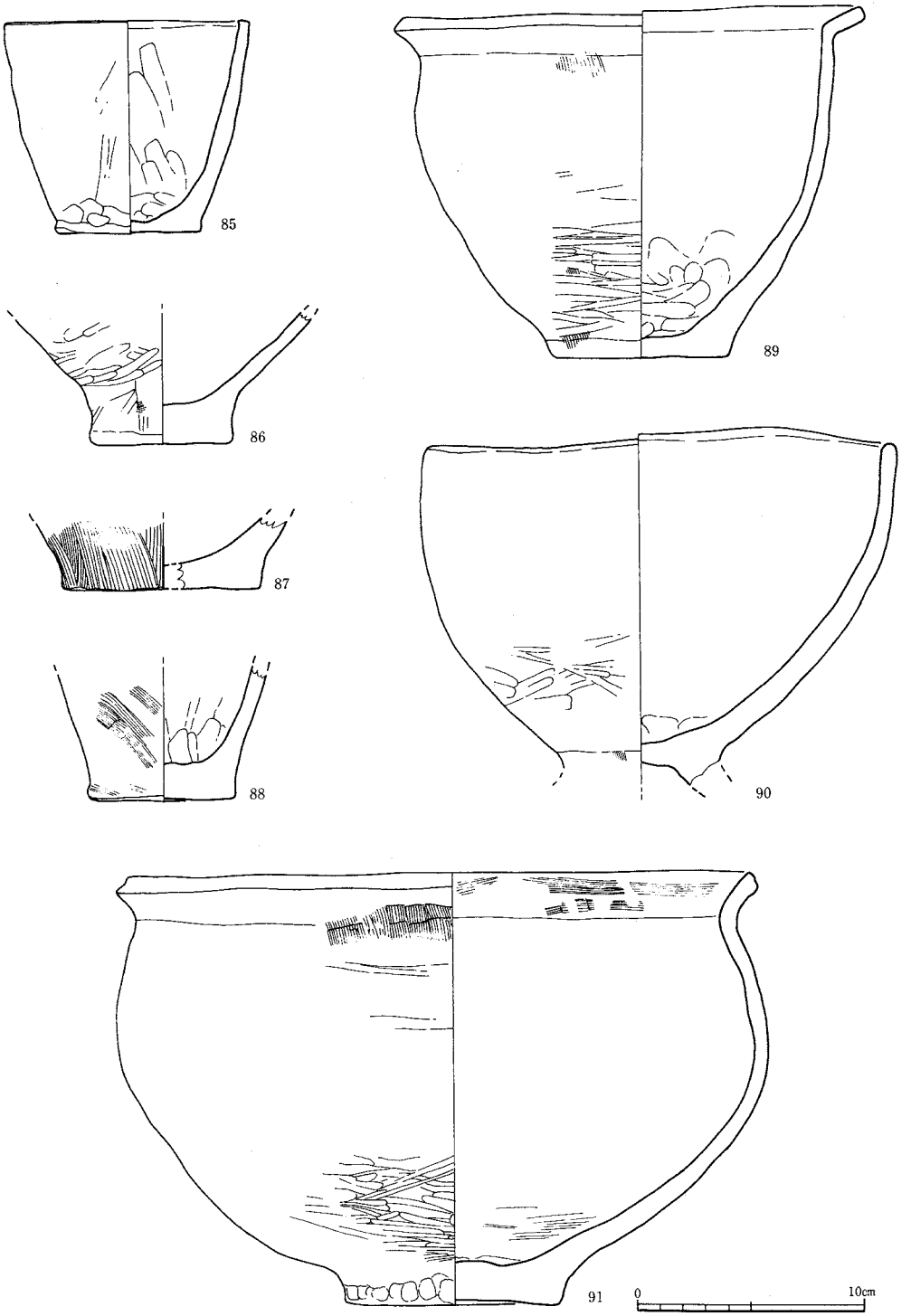


Fig.22　S X01出土遺物実測図Ⅰ（1／3）

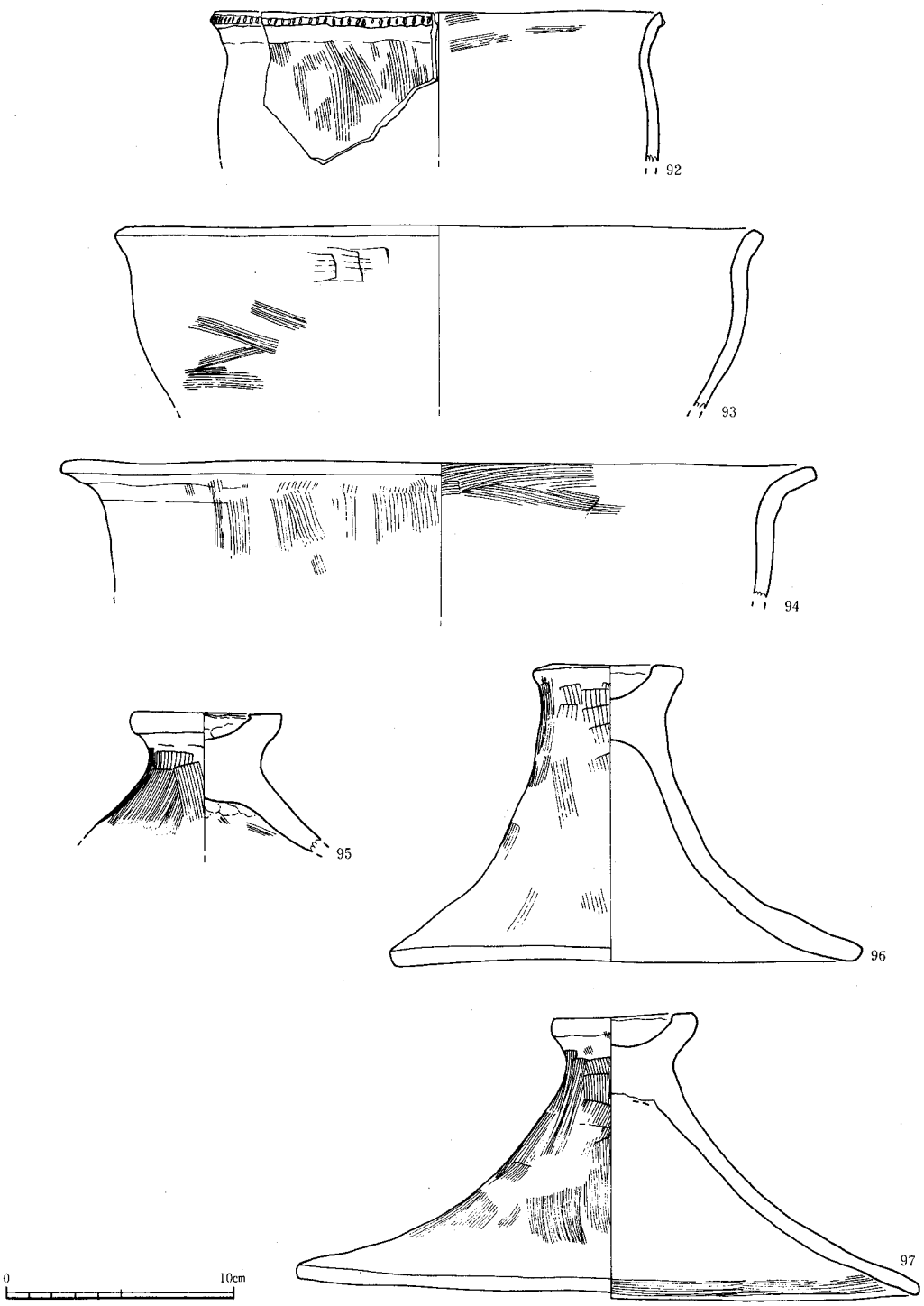


Fig.23 ＳＸ01出土遺物実測図Ⅱ（1／3）

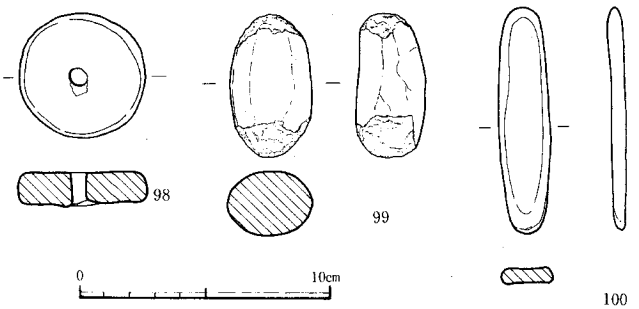


Fig.24 ＳＸ01出土遺物Ⅲ（1／3）

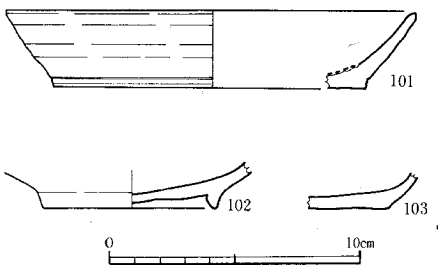


Fig.25 ＳＸ02～04出土遺物（1／3）

遺物

ＳＸ０１

85は小鉢で復元口径10.8cm、器高9.2cmを測る。体部内外面は上下方向のナデ、底部付近には指頭痕がのこる。**86**は壺の底部、**87**、**88**は甕の底部である。**89**は口径20.9cm、器高7.6cmを測る。外面ミガキで一部ハケ目が残る。内面ナデか。**90**は口径20.9cmを測る。脚部は欠損している。口縁端部は丸く仕上げる。外面ミガキ、内面もミガキか。**91**は広口壺で完形にちかい。口縁内外面にハケ目が残る。体部は内外面ミガキを施す。外面底部には指頭痕が明瞭に残る。口径27.5cm、器高19cmを測る。**92**は刻み口縁の甕で、口径20.2cmを測る。**93**は復元口径29.0cmを測る。内面にナデを施し、わずかにハケ目が認められる。**94**は復元口径33.6cmを測る。体部内面ナデ。わずかにハケ目が残る。**95～97**は壺。96は口径21.0cm、器高13.2cmを測る。97に比べ厚く、口縁端部が肥厚する。97は口径27.6～28.4cm、器高12.7cm。口縁部付近の内外面にヨコハケを施す。**98**は土製紡錘車で径5.0cm、厚さ1.3cmを測る。**99**は両端部を打ち欠き、他はなめらかに磨かれる。全長5.7cm。投弾か。石材は@。**100**は全長8.9cm、厚さ６mmを測る。両端部は丸くすぼまる。表裏は中凹に磨かれる。凝灰岩製か。

ＳＸ０２～０４

101はＳＸ02、102はＳＸ03、103はＳＸ04から出土。**101**は土師器杯で復元口径16.3cm、器高3.1cmを測る。外底部に糸切り。**102**は瓦器、**103**は土師器杯である。外底部糸切り。

V　まとめ

ここでは、今調査で検出された遺構の中心をなす中世遺構について記す。

遺構の配置と時期

(1)　大溝（ＳＤ０６）について

Ⅱの項で記したように、当調査地点が位置する早良平野は水田、道路等に条里の遺制が良く残る。ＳＤ０６も調査区北側を走る現況道路に並行して検出された。この西側延長方向では有田第３次、51次調査で大溝（１号溝）が検出されている。しかし、この大溝は有田台地に入り込む谷落ちで途切れ、更にその東側の台地縁辺には金屑川が北流するので、本調査区まで一連に続くものではない。

現在までの調査や文献、地理学等から条里の推定復元が進みつつある。図に示したものは「牟[注]多田遺跡」の条里復元図である。図から大溝は里境から１町北側の東西ラインを通ることになる。条里方向の溝として他に田村遺跡第７次調査のＳＤ０１、ＳＤ０３がある。南北方向のＳＤ０１に直交してＳＤ０３が走る。復元図の里境からの距離も町単位に切れるようである。時期は12世紀後半から13世紀が考えられている。

次に今回検出された大溝の時期について記す。遺物が小量小片のため不確定の要素を残すが８～９世紀代のものが出土した。(79は上層出土で溝に伴うものか疑問である。)有田第３次調査の１号溝からはやや降る時期の遺物の出土している。切り合い関係からは大溝を切る溝が12世紀以降、更にそれを切る掘立柱建物群が13世紀後半代まで存続し、大溝はそれ以前の所産になる。

水利の問題として地形的に西側の金屑川から取水することが考えられるが具体的な事は不明である。また社会的な背景についても今後の課題である。

(2)　掘立柱建物について

上記した通り、井戸や土壙出土遺物から村落として営まれた時期は13世紀後半代と考えられる。切り合いや遺構の密度から、前代の水田水利としての溝が廃棄されたのち、短期間営まれたのであろう。掘立柱建物は調査区北西部の３基の井戸を取り囲むように配置されている。向きもＳＢ０１、ＳＢ１０が東西棟でその中間には南北棟が配置される。村落の中心部は地形からも北西方向になるものと考えられる。

掘立柱建物の構造は身舎２×３間が主をなす。柱間は210cm（７尺）のものが多い。側柱の周囲には軒柱が取付くものがある。構造的に如何なるものか不見識ではあるが、規模から廂とせず軒と考えておきたい。また全周しないものがほとんどで隠し塀としての可能性がもたれるものもある。掘立柱建物の構造については田村遺跡で検出されたものと良く類似することを最後に記しておく。以上中世村落が中心になる調査であったが、その縁辺部であるため全体像は今後の調査に期す。

Fig.26 1．原10次
2．有田3次・51次
3．田村7次

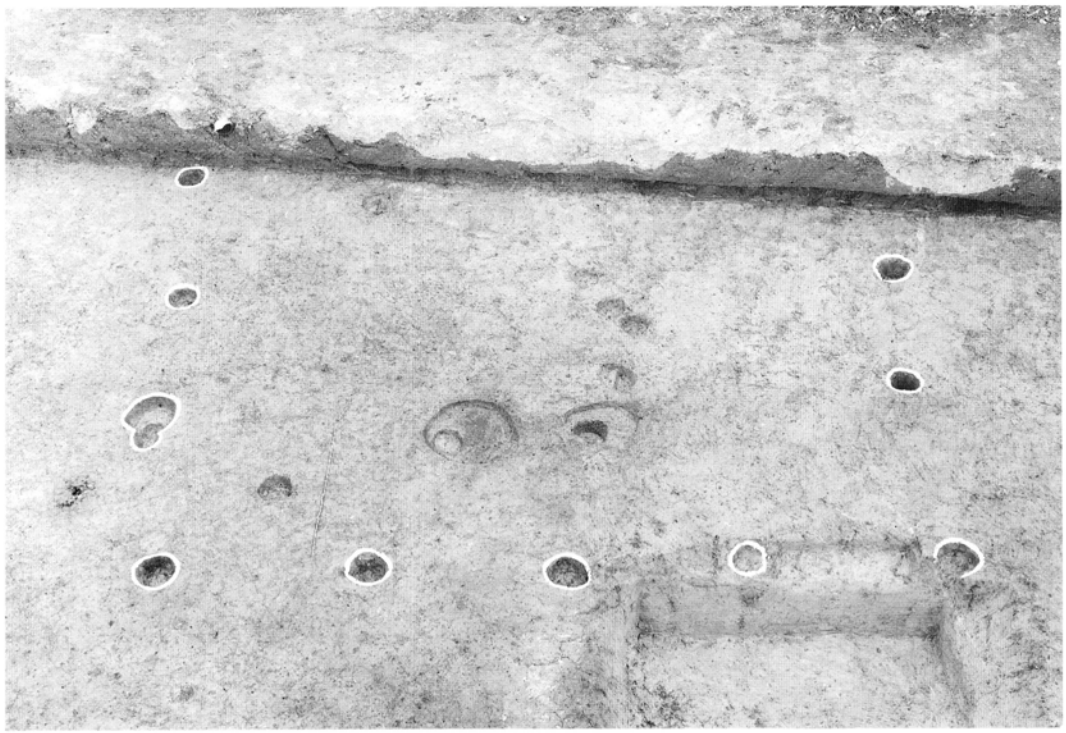
「牟多田遺跡」原図にドットを添付　　注.「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告第27集 1974

図　　版
PLATES

調査区近景（南東から）

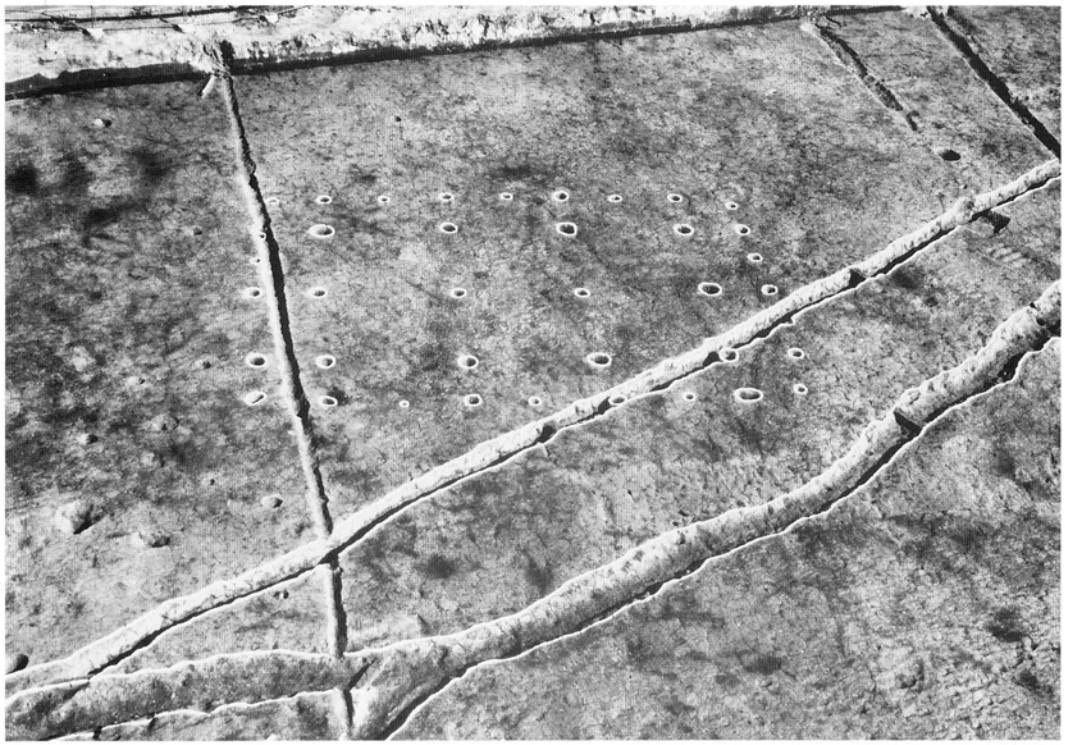
（上）調査区北西部（Ⅰ区）全景（南から）　　（下）調査区北東部（Ⅱ区）全景（南から）

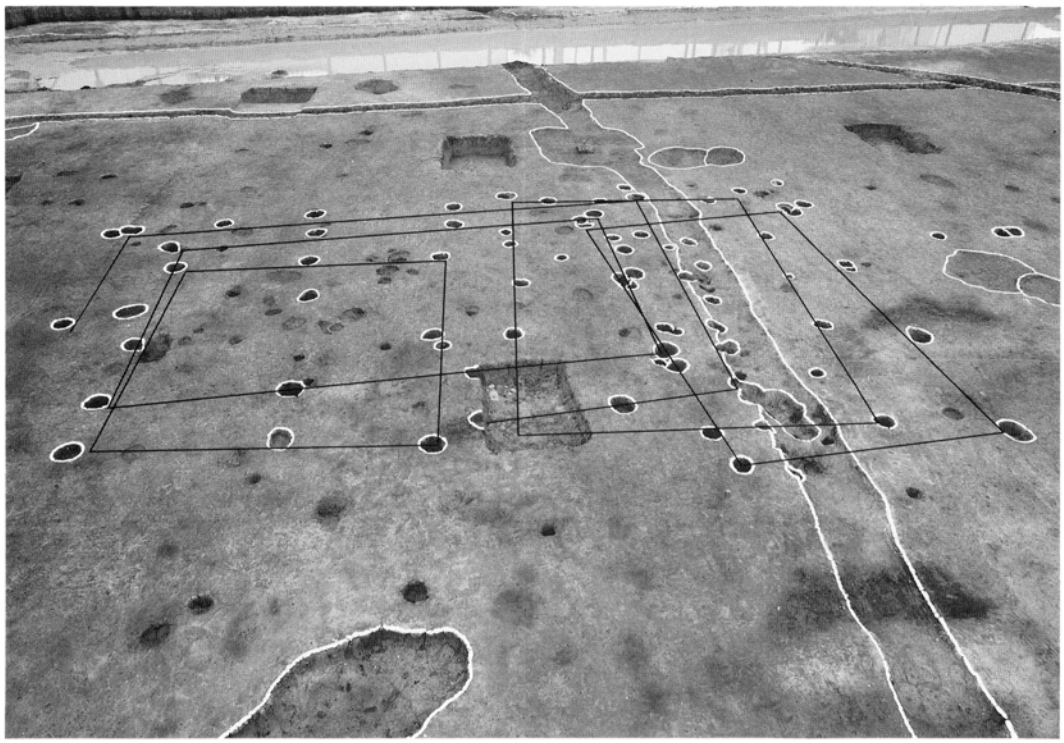
（上）調査区南部（Ⅲ区）全景（西から）　　（下）調査区Ⅰ区北西部土層断面（南東から）



（上） ＳＢ01検出状況（北から）　　（下） ＳＢ02検出状況（東から）

（上） ＳＢ03、04検出状況（西から）　　（下） ＳＢ04検出状況（東から）

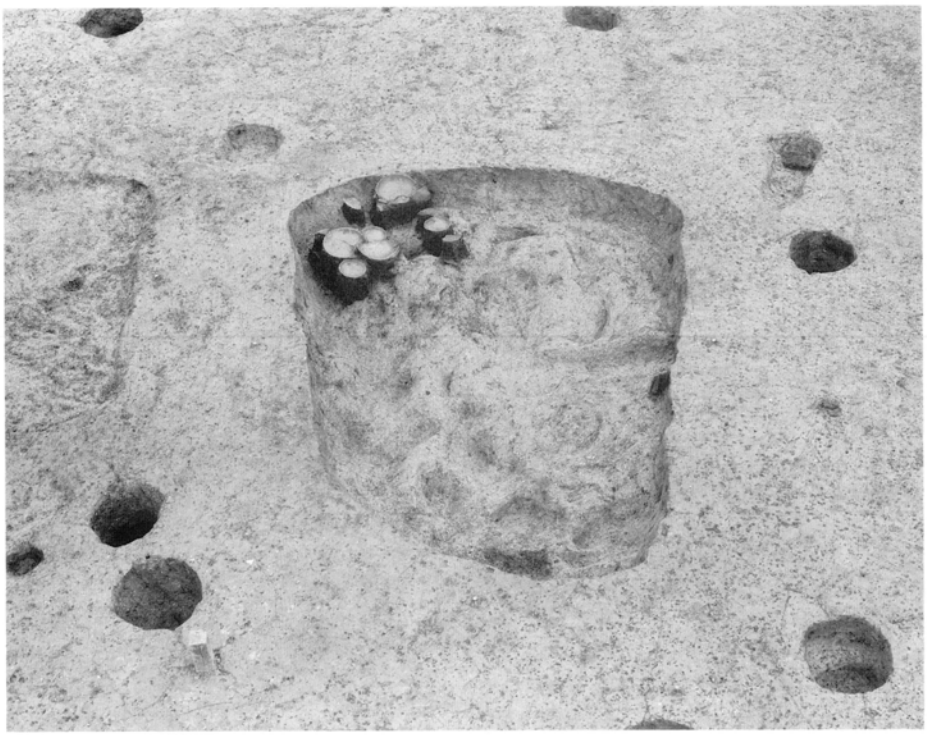




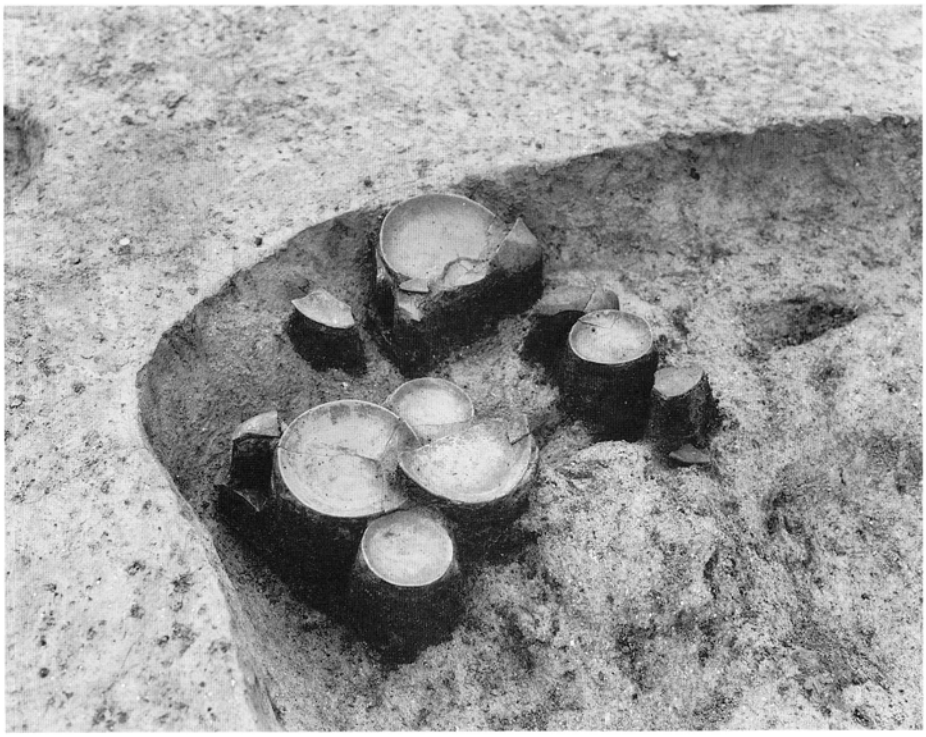
（上） ＳＢ06検出状況（西から）　　（下） ＳＢ07～10検出状況（南から）

（上） ＳＢ11～16検出状況（南から）　　（下） ＳＥ01完堀状況

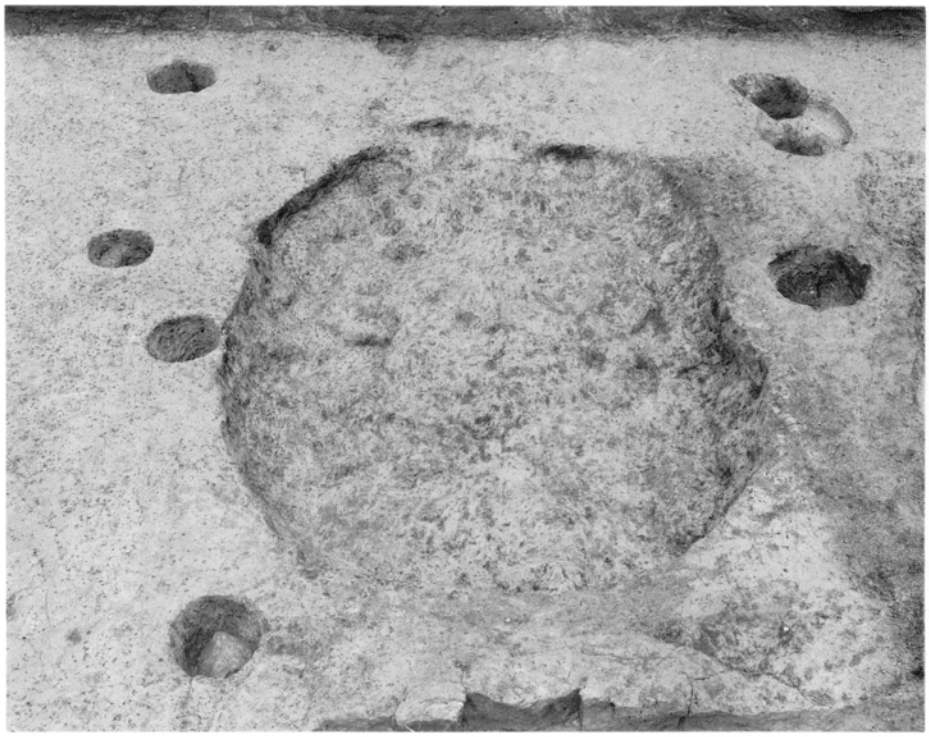
（上） ＳＥ02完堀状況（西から）　　（下） ＳＥ03完堀状況（南から）



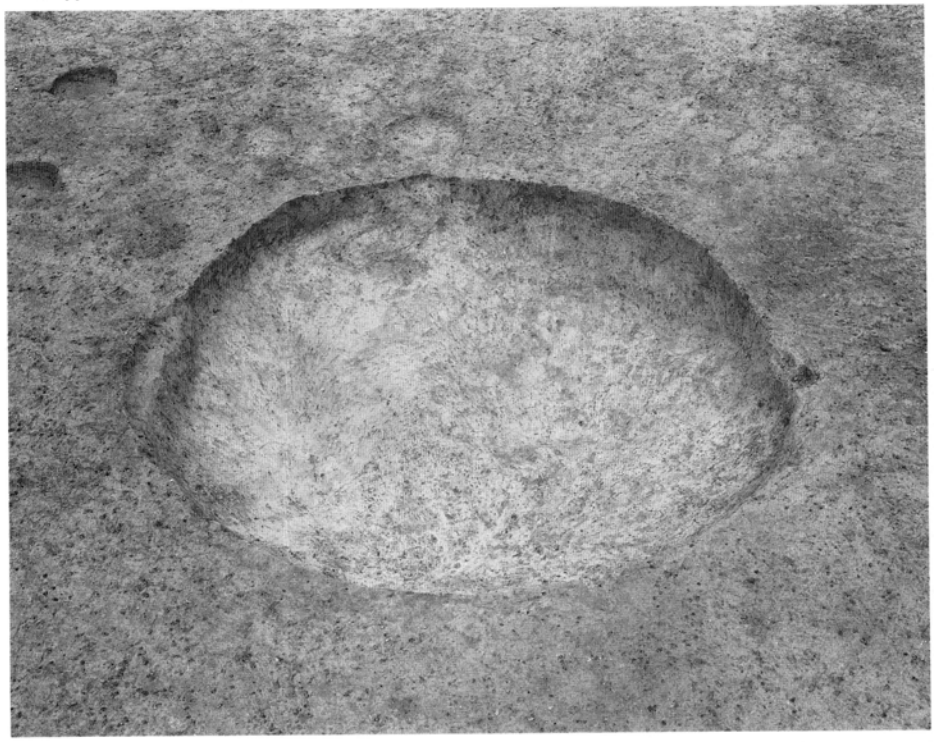
（上） ＳＫ01～03完堀状況（東から）　　（下） ＳＫ01完堀状況（北から）



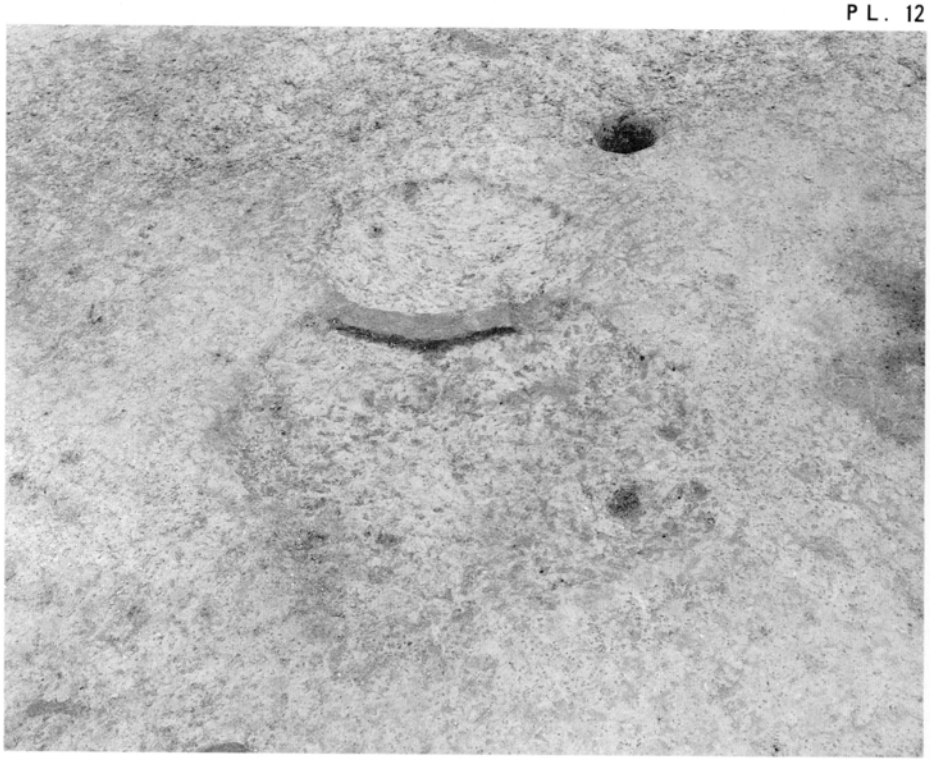
（上）ＳＫ01遺物出土状況（北から）　　（下）ＳＫ02完堀状況（北から）

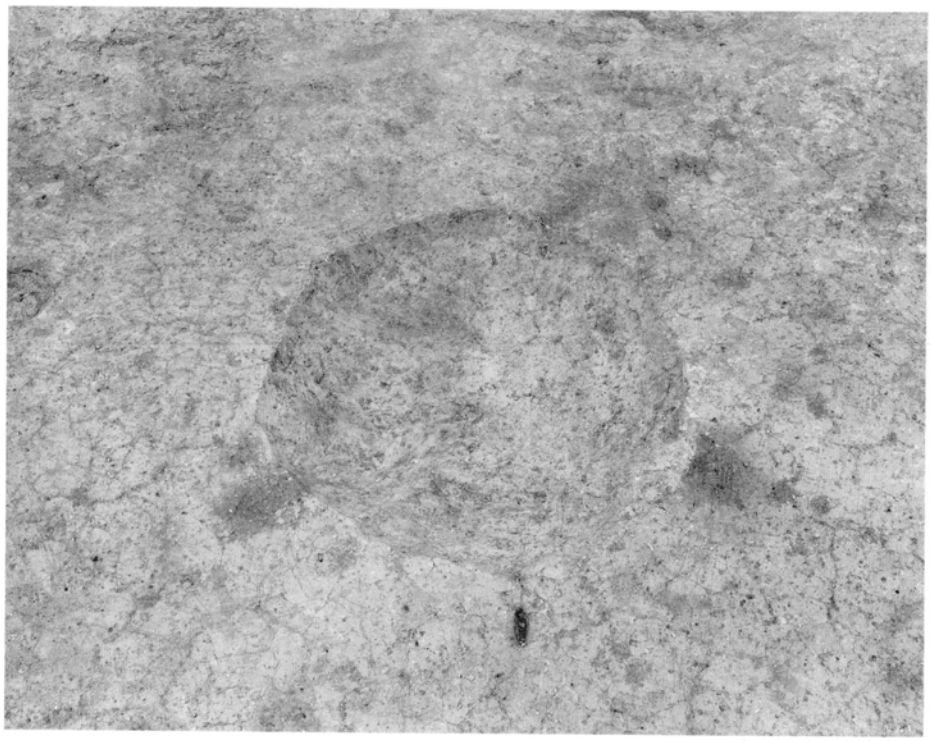


（上） ＳＫ03完堀状況（東から）　　（下） ＳＫ04完堀状況（東から）

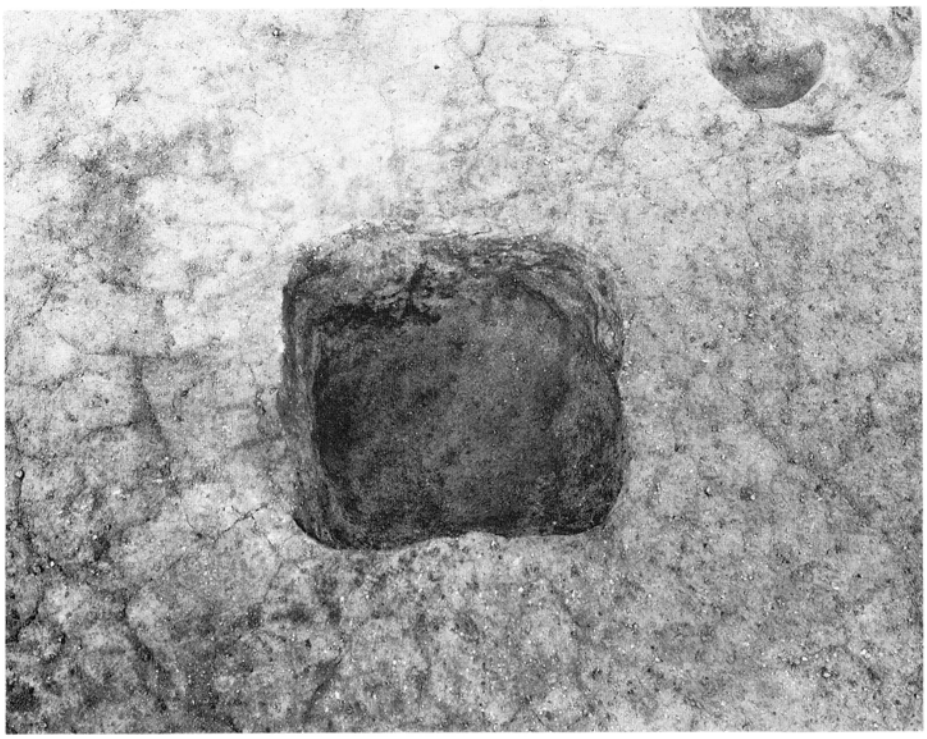


（上） ＳＫ05完堀状況（東から）　　（下） ＳＫ07、08完堀状況（南から）

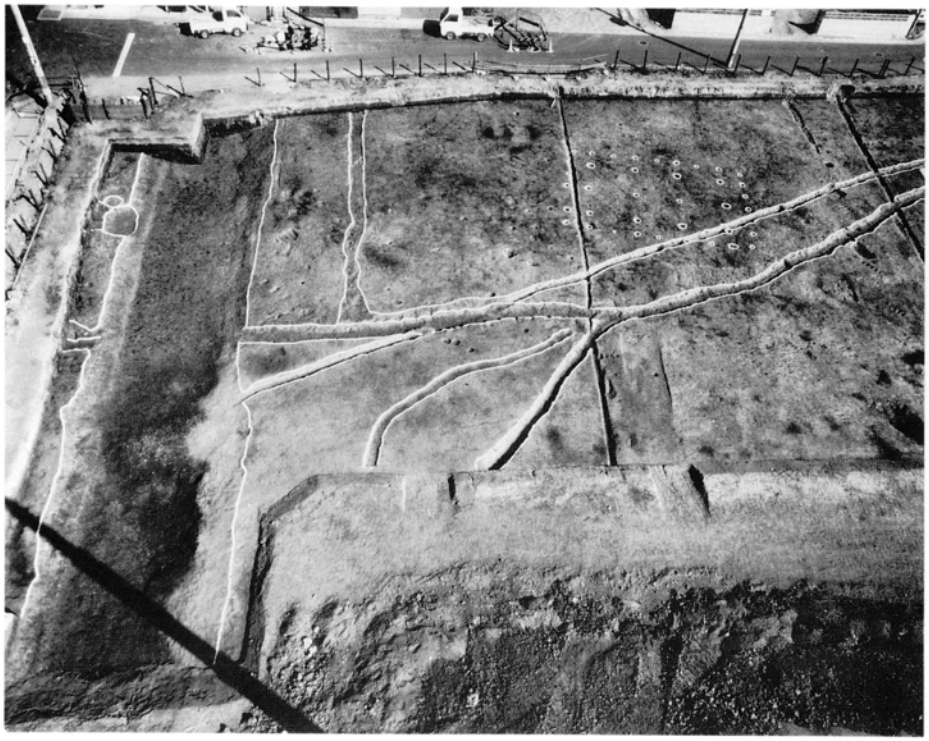




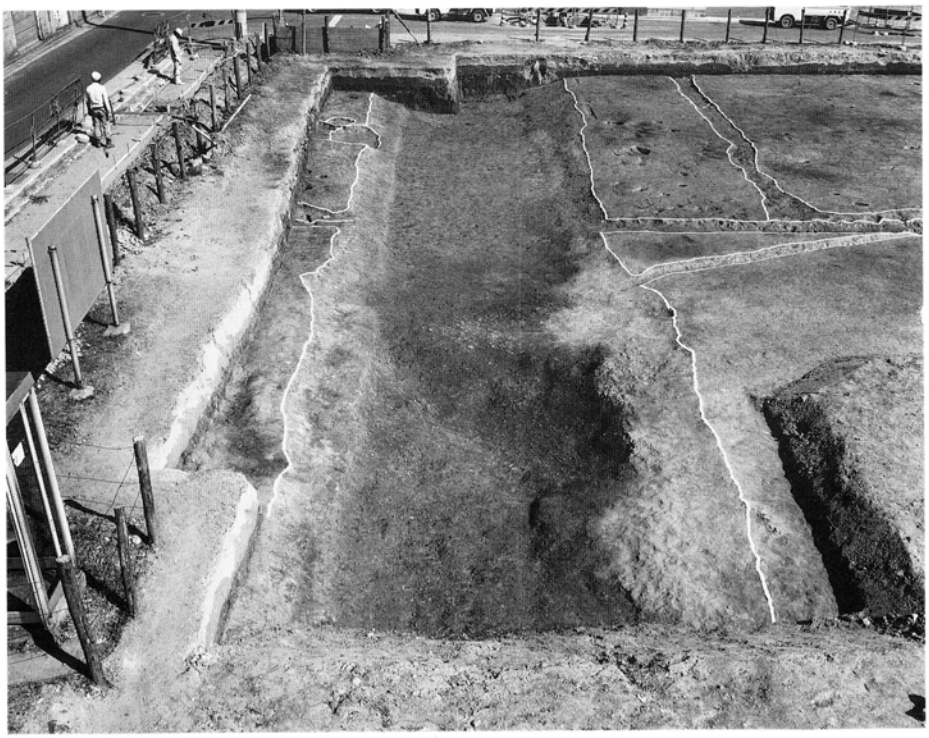
（上） ＳＫ09、10完堀状況（北西から）　　（下） ＳＫ11完堀状況（西から）



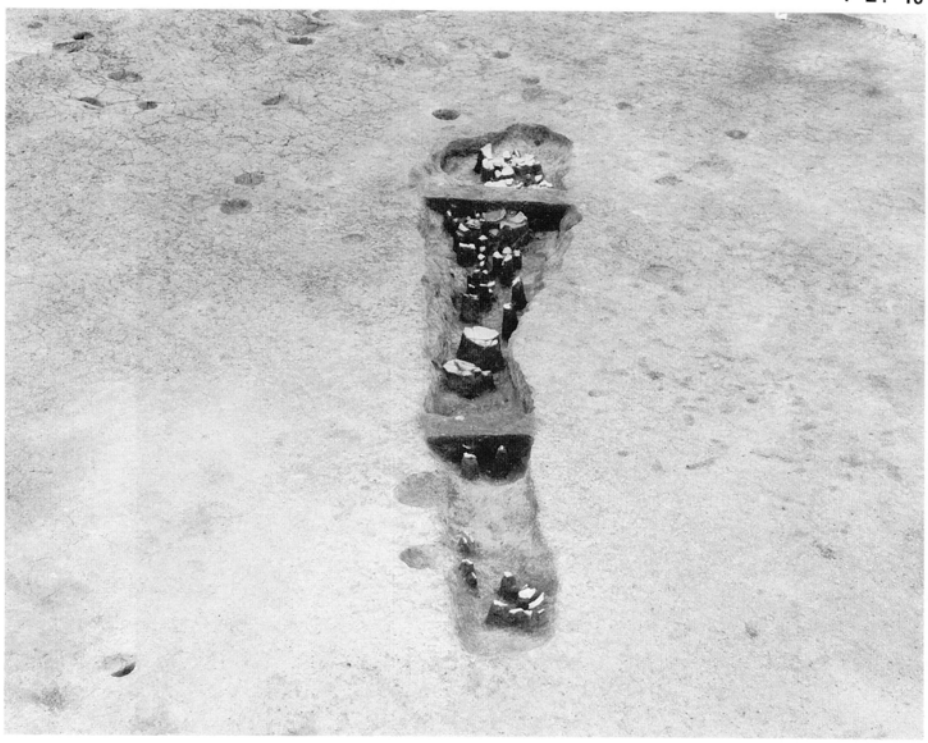
（上） ＳＫ12完堀状況（東から）　　（下） ＳＫ13完堀状況（西から）

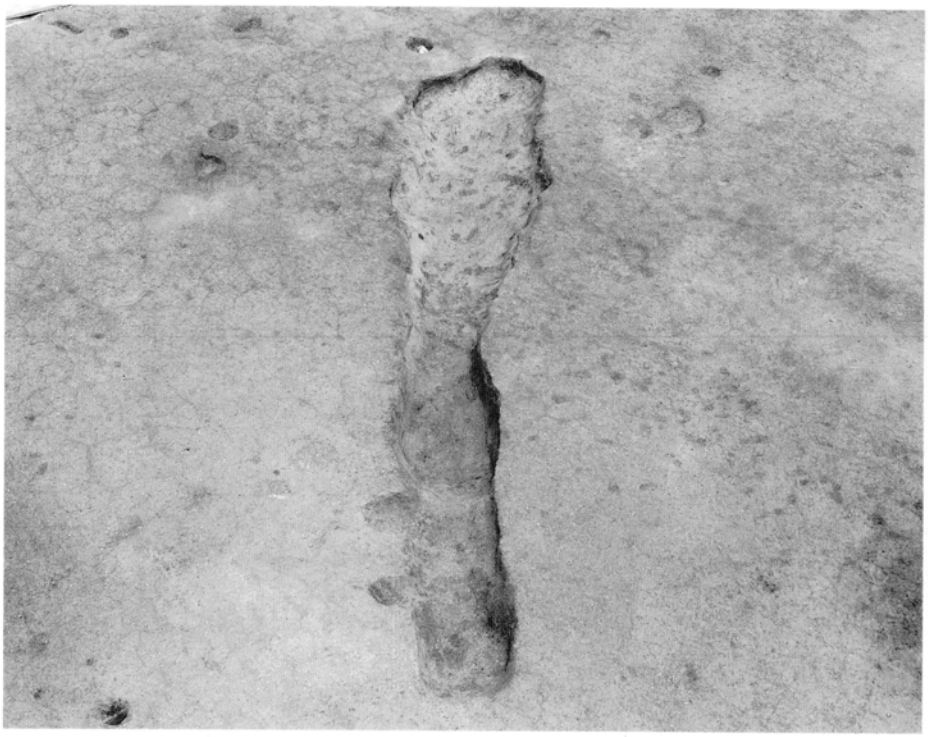


（上）調査区北東部全景（西から）　　（下）大溝中央ベルト断面（西から）

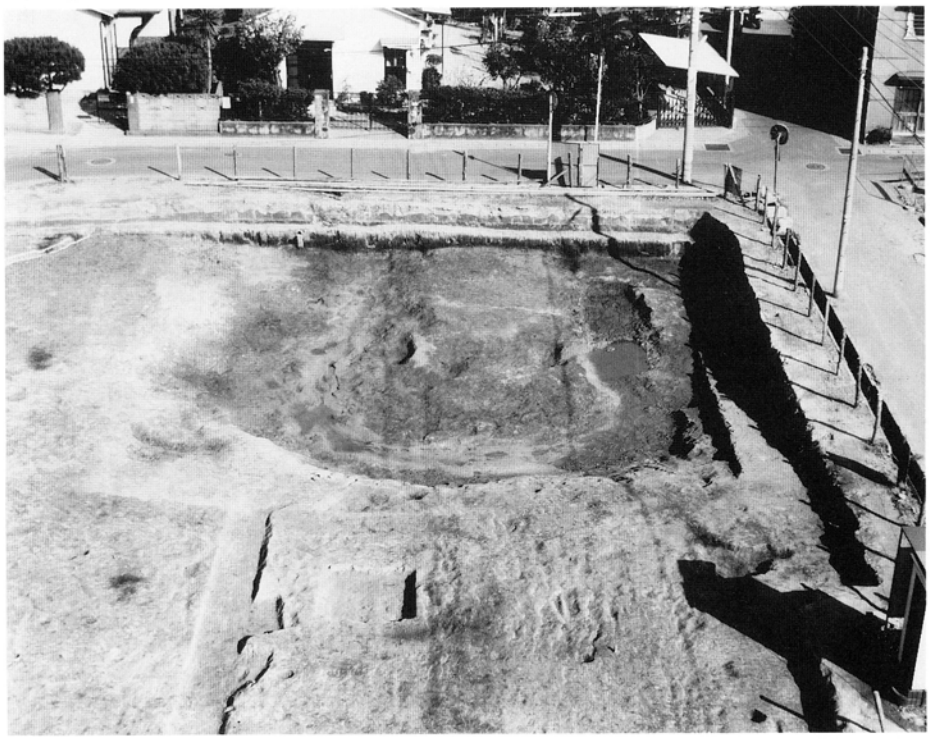


（上）大溝（西から）　　（下）大溝（ＳＤ06）全景（東から）



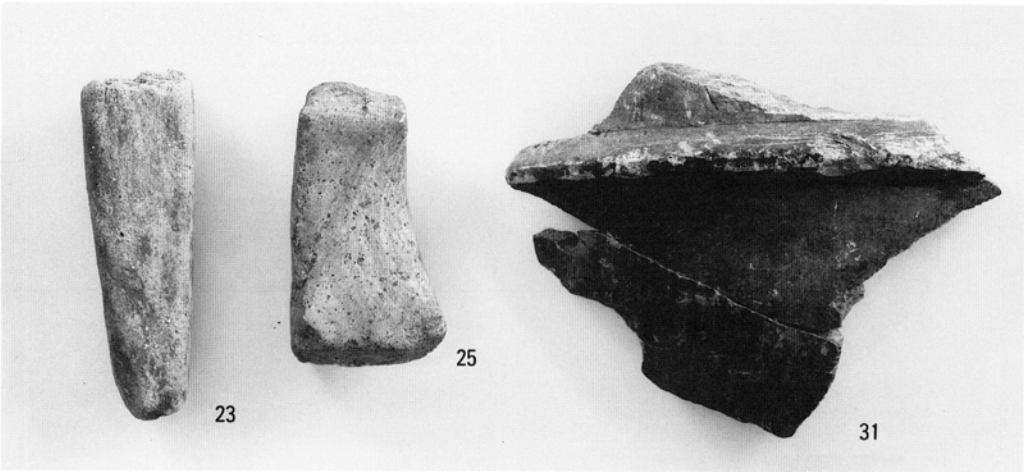


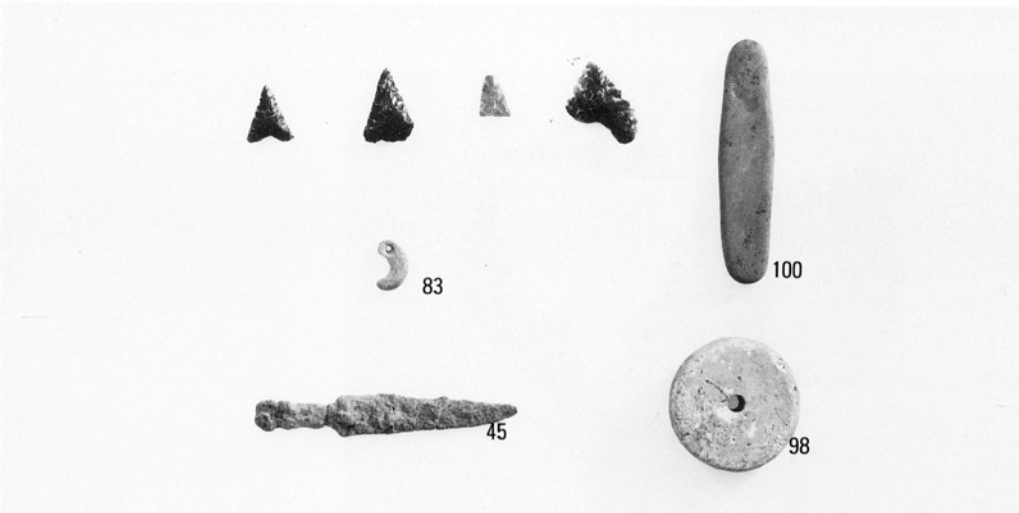
（上） ＳＸ01遺物出土状況（南から）　　（下） ＳＸ01完堀状況（南から）



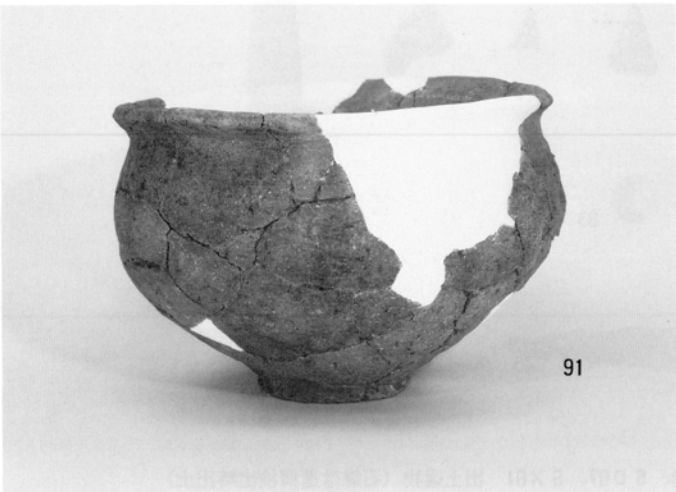
（上）池状遺構（西から）　　（下）池状遺構土層断面遠景（北から）

SE03、SK01　出土遺物





SK01、SE01、03、SD07、SX01　出土遺物（石鏃は遺構検出時出土）



SX01　出土遺物

原遺跡３

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第215集

1990年　（平成２年）　３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－７－23

印　刷　福博綜合印刷㈱